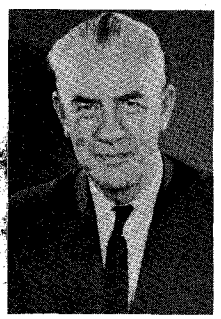
1968年6月20日発行（毎月1回20日発行）第12巻第6号
昭和42年12月18日第三種郵便物認可

聖徒の道

6



心　の　糧

十二使徒評議員
マーク E. ピーターセン長老

信仰箇条の一つに次のような言葉がある。
「我らは正直…なるべきこと…を信ず」（信仰箇条13条）

これはわれわれの教会にとって最も大切な信条の一つであると同時に，実行するに最も難しい言葉でもある。正直はバプテスマや死者の復活と同様に，真のキリスト教の土台であり，あらゆるよき性格を発展させる基礎となるものである。

キリストはまず神の国と神の義とを求めよと言われた時，われわれに目的に対して誠心誠意たちむかうことを述べられたのであり，これこそ正直な態度である。

キリストは一つの原則に二つの考え方や，二重の標準に従って生きることや，道をはずれた行いを認められるであろうか。

キリストにあってはいかなる不誠実もあり得ない。そうであるとすればキリストに従う者たちも不誠実であってはならない。キリストが次のように言われた時に，何を意味されたのか。「あなたはうそをついてはならない」「あなたは盗んではならない」「あなたはむさぼってはならない」。

キリストは，われわれが大きなうそをつかないからと言って，小さなうそをつくことをお許しになるだろうか。

大きな窃盗を働かないならば，ここで少しあそこで少しと盗むことをお許しになるだろうか。

多くの人々が現実にそのような恐ろしい教義を信じていることは悲しむべきことである。キリストにおいて救われるべきただ一つの道がある。それはあらゆる偽善を避け，誡命を心から正直に守ることである。

もくじ

神殿の目的……大管長 デビッド O. マッケイ……95
モルモンはなぜ神殿を建てるか …… マーク E. ピーターセン… 102
神殿を仰ぎ見て…… ジョン A. ウォッツォー… 110
啓示…… ドイル L. グリーン… 113
古代の神殿…… シドニー B. スペリー… 118
末日聖徒の結婚…… ヒュー B. ブラウン… 124
新しい教会幹部…… 127
伝道部長会メッセージ…… アドニー Y. 小松… 130
ローカル・ニュース…… 134

教会歴史

6月7日
1849年：毎月第一日曜日が断食日とされる

6月10日
1875年：YMMIA組織される

6月27日
1844年：ジョセフ・スミスとハイラム・スミス殉教す

今月の表紙

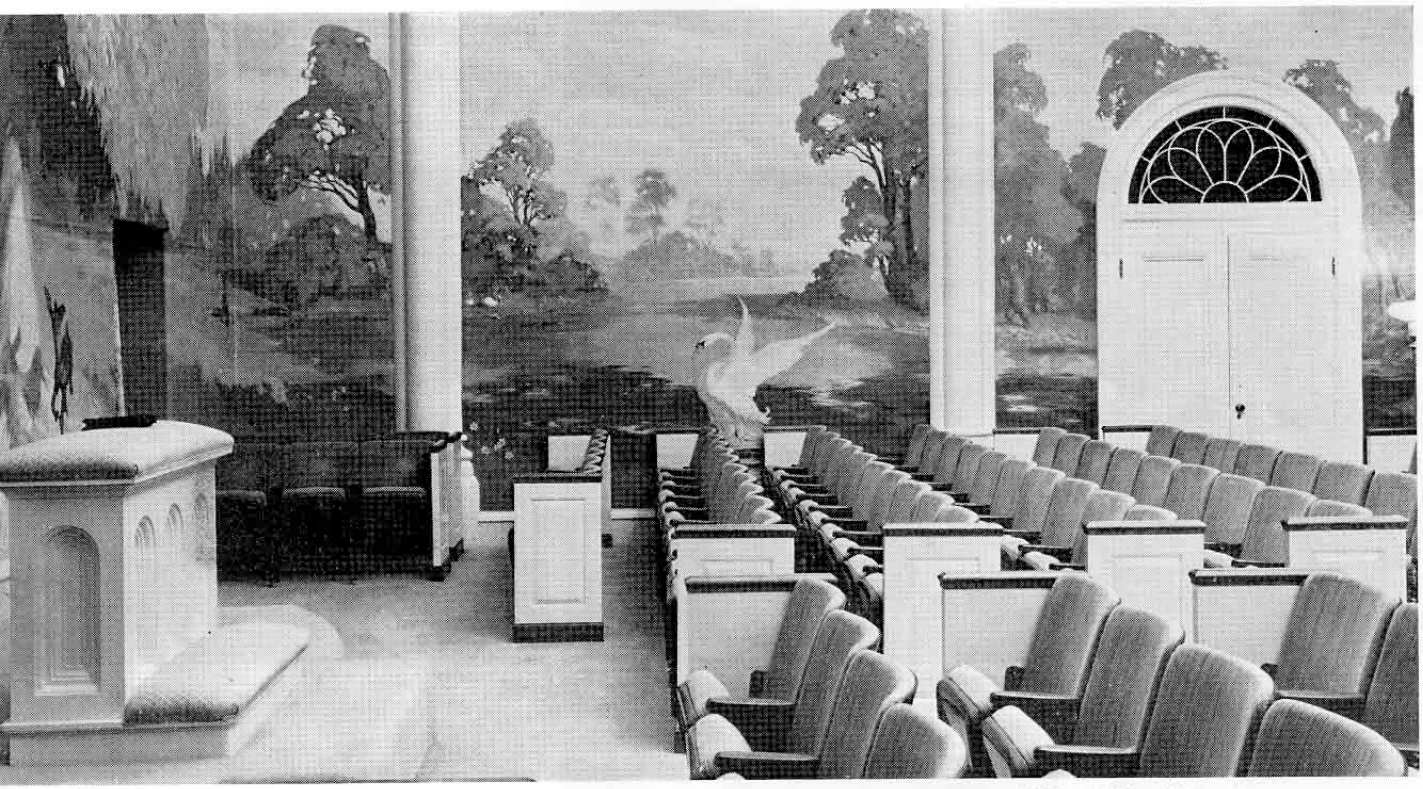
末日聖徒イエス・キリスト教会のきわだった特徴の一つは，神殿の重要性とそこで執行される儀式に関する教えである。

表紙はソルト・レーク神殿
裏表紙はオークランド神殿

＜予言者のことば＞

神殿の目的

大管長　デビッド O. マッケイ



セント・ジョージ神殿の「園の部屋」

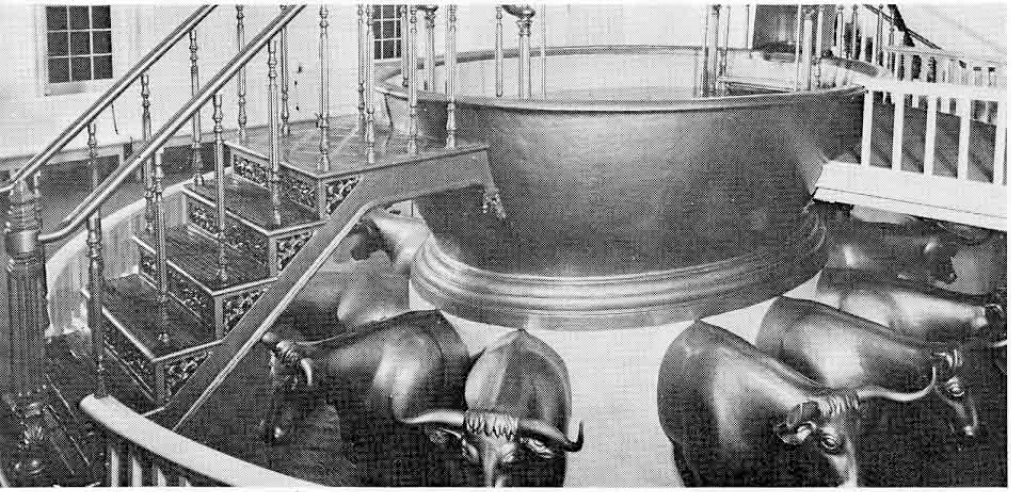
私が報道関係者や一般の人々に問われる主な質問の一つに「あなたの教会の神殿と教会の他の建物との違いは何ですか」という問いがある。教会員のみなさまが知っておられるように，神殿は聖なる儀式——秘密の儀式ではなく神聖な儀式を執行するために建てられるのである。

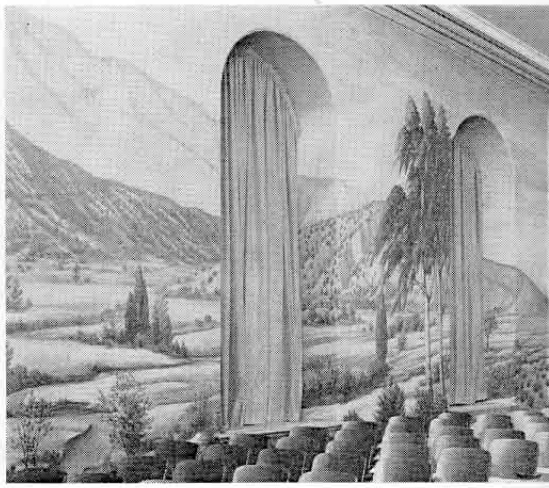
回復されたイエス・キリストの教会のきわだった特徴の一つは諸儀式が永遠のものであるということである。たとえば教会の市民結婚や一般の結婚式では「生命のあらん限り」とか「死が二人を分つまで」として夫婦は結ばれる。しかし，愛は人の霊と同様に永遠である。人が死後も存在するならば確かに愛も永遠に存続する。この点については人の魂の最も神聖な属性である愛が霊それ自体と同様に永遠であるという真理を理解するならば，ほとんどすべての聡明な求道者は特に深い関心を示すのである。それで肉体が滅びた後も愛という徳性が残ることや，魂の不滅性および死後の人格の存続を信じる者は皆，愛もまた存続することを認めるのである。

当然，次のような質問が出て来る。来世で私たちは誰を愛したらよいのであろうか。私は何年か前，南洋を旅している時にあるご夫妻に会った。その夫人は，この質問に答えて，「私たちはすべての人を愛さなくてはなりません。」と言った。

「結び固めの部屋」ここで今も永世にもわたる結婚の儀式が執行される

左下　神殿内の「バプテスマ・フォント」は12頭の鋳鉄の牛に支えられている





「現世の部屋」

セント・ジョージ神殿の「アッセンブリー・ルーム」この美しいホールでは特別な集会が開かれる

「そうです。私たちはこの世においてもすべての人を愛さなくてはなりません。」と私は答えた。隣り人を自分自身のように愛することは救い主の誡命である。しかし，地上の事柄が天上の事柄のひな型であるなら，私たちは霊界において愛する人々を認め，彼らをこの世で愛したように愛するであろう。私は他の人々を愛する以上に私の妻と，子供たちを愛している。私は思いやりを持つことができ，すべての人類を助けたいと願っている。けれども私はいつもかたわらにすわり愛する病人を看病して，おそらく私のこの世の最後を見守ってくれる妻を深く愛している。私には，妻と共に得た経験により，心と心は堅く結ばれて，死もその二つの心を分かつことができないというすばらしい確信がある。あなた方夫は来たるべき世においてその妻を認めるであろう。そしてあなたは，この世において愛したと同じように彼女を愛し，復活によって永遠の生命の新生へと向って行くであろう。愛は死後も続くのにどうして死があなた方を分かつことができようか。

そのようなことがあるべきはずはない。なぜなら，キリストは地上におられた時十二使徒に向って云われた。「わたしはあなたに天国のかぎを授けよう。そしてあなたが地上でつなぐことは天でもつながれあなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」（マタイ16：19）

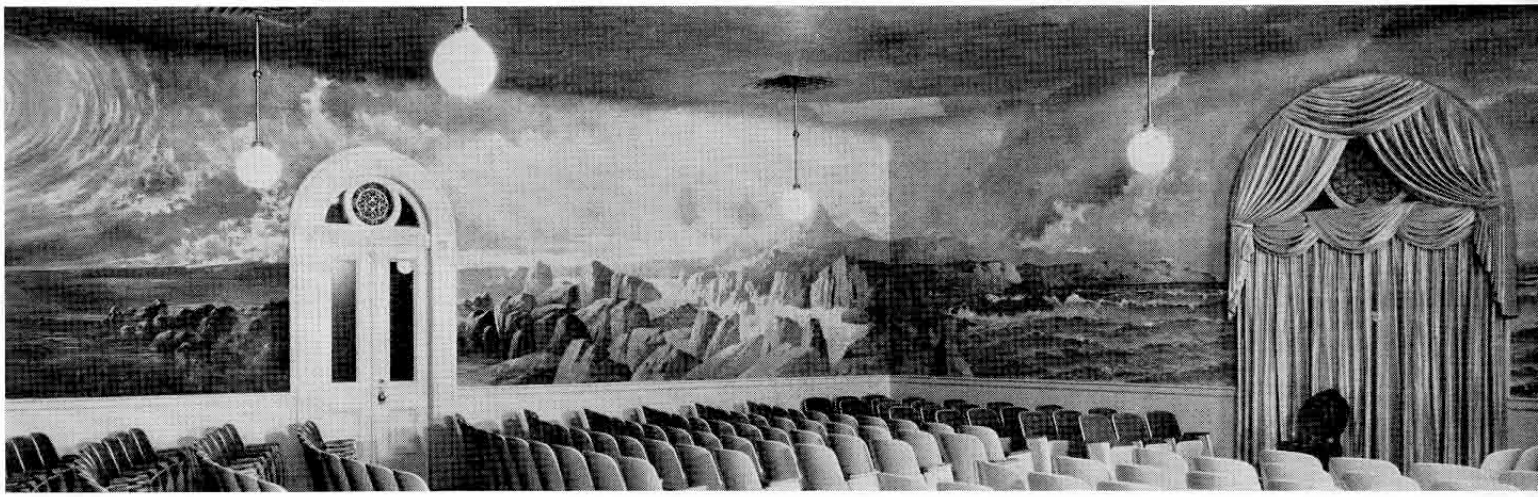
聖なる神権が地上に回復されると，その力は再び選ばれた人々に与えられた。そして主の家で主と救い主イエス・キリストを代表する正しい権能を与えられた者によって結婚の儀式が執行されるようになり，その夫と妻や両親と子供たちの間のきずなは今も永世にも続くのである。このようにして結ばれた人たちにとってその家族は永遠に続く。

これが神殿の一つの目的である。

神殿にはもう一つの目的がある。

それは一般の人々には容易に理解されないが，その人々が神の公正さを少しでも知り，次のようにたずねられると，はじめて理解できるであろう。

「神の王国へ入るためにある人にだけ原則と儀式を行うよう要求されて，あなたがそれをうけいれることなしにその神の王国に入れると思いますか。」イエス・キリストを救い主として受けいれ，すべての人に与えられるキリストの言葉を受け入れて，原則に従う必要を認める人々はみな，根本的な儀式を受ける必要のあることを必ず認めなければならない。さもなければだれもそれを受け入れる必要がないことになってしまうのである。それは明白な事実であり，皆さまの知っておられるように聖典の中で救い主は永遠の計画について多く述べておられる。



「創造の部屋」ソルト・レーク神殿内の色彩豊かな壁画は地球の創造をあらわしている

たとえば参議会の会員であるニコデモの場合は次のように記されている。この人が夜イエスのもとにきて言った「先生わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っています。神がご一緒でないならあなたがなさっておられるようなしるしはだれにもできはしません。」イエスは答えて言われた「よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ神の国を見ることはできない。」ニコデモは言った「人は年をとってから生れることがどうしてできますか。もう一度母の胎にはいって生れることができましようか。」イエスは答えられた，「よくよくあなたに言っておく。だれでも水と霊とから生れなければ神の国にはいることはできな

左上段 ソルト・レーク神殿の「会議室」、大
は、この部屋で毎週木曜日の午前に
左下段 マンタイ神殿の「結び固めの部屋」
このような部屋で永遠の結婚が行わ
び固められる
下　段 アイダホ・フォールズ神殿の「日の
右上段 ソルト・レーク神殿の「日の光栄の
右下段 ソルト・レーク神殿の　月の光栄の
間の永遠の旅に関する導きを与えら

長会と十二使徒評議員会
合する

、夫婦は今も永世にも結

栄の部屋」
屋」
屋」、このような部屋で人
る

ソルト・レーク神殿の「現世の部屋」アダムとイブが追い出された荒涼としたさびしい世界をあらわしている

い。」（ヨハネ３：２～５）これこそ真理である。

ニコデモに対する救い主の言葉は教会の信仰深い会員によって文字通りの意味に受けとられている。聖句は生きている者と死んだ者に何の差別をも与えていない。この法則はただ幼く，あがなうべき罪なくして死んだ子供たちのみを除いてあまねく全人類に及ぶものである。万人に救いの道を提供するために，神殿において生きている者が死者の代りにバプテスマを受けるのである。

このような代理の仕事が初代キリスト教会内でも行われていたことはコリント人へのパウロの言葉でも知ることができる。「そうでないとすれば死者のためにバプテスマを受ける人々はなぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすればなぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか」（Ｉコリント15：29）。

みせかけのキリスト教各派はこの簡単な言葉の意味につまづき，多くの注解者は救い主の教えが全人類に及ぶという真理をゆがめて解釈している。

くり返して申しあげる。バプテスマが一人の人に欠くべからざるものならそれはすべての人にも同様に欠くべからざるものなのである。アメリカの有名な大学を卒業した中国人が学生時代にプロテスタントのある牧師と話していて次のような質問をした。「キリストの名前を聞かずに死んだ私の先祖たちはどうなりますか？」「ああ，残念ですが彼らはみな救われません。」彼の正義感はその答えに納得できなかった。彼はすぐに「私はそんな不公平な宗教を信じたくありません。」と言った。その中国人の教授あるいは博士がその質問をもしモルモンの長老にしていたとしたら，「彼らは福音を聞く機会を得，水と霊とから生れるためにバプテスマを受けて，神の王国へも入ることができます。」と答えていたであろう。

イエス・キリストの名前を聞かなかったあなたの遠い先祖たちはどうであろう。キリストの名を聞かずして死んだ幾百万の人々はどうであろう。彼らはあなたや私と同じような天父なる神さまの子供たちなのである。彼らがイエス・キリストの御名を聞く機会を持たなかつたために神の王国の外に永遠につながれることは愛の神のなさることであろうか。

いいえ。そうではない。私たちは「キリストの贖罪によりすべての人類は福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得る」と信じている。また私たちは死すべきこの世で福

「日の光栄の部屋」ロンドン神殿

音を聞かなかった人々は次の世でそれを聞く機会があることをも信じている。

肉体が墓に横たえられていた時キリストの霊はどこへ行っていたのか。使徒ペテロは，キリストの霊はノアの時代に彼に従わず，今は獄にとらわれている霊たちのところへ行って宣べ伝えられたと述べている。（Ⅰペテロ３：19～20）何千年も前に死んだ人々が今霊界で生きており，福音は天父なる神の子供たちすべてに与えられるように，彼らにも与えられるのである。

これが神殿のもう一つの目的である。あなたは先祖の名前を集めることができ，先祖は代理人によりバプテスマを受けて，私たちがこの世で会員であると同じように次の世で神の王国の会員となることができるのである。

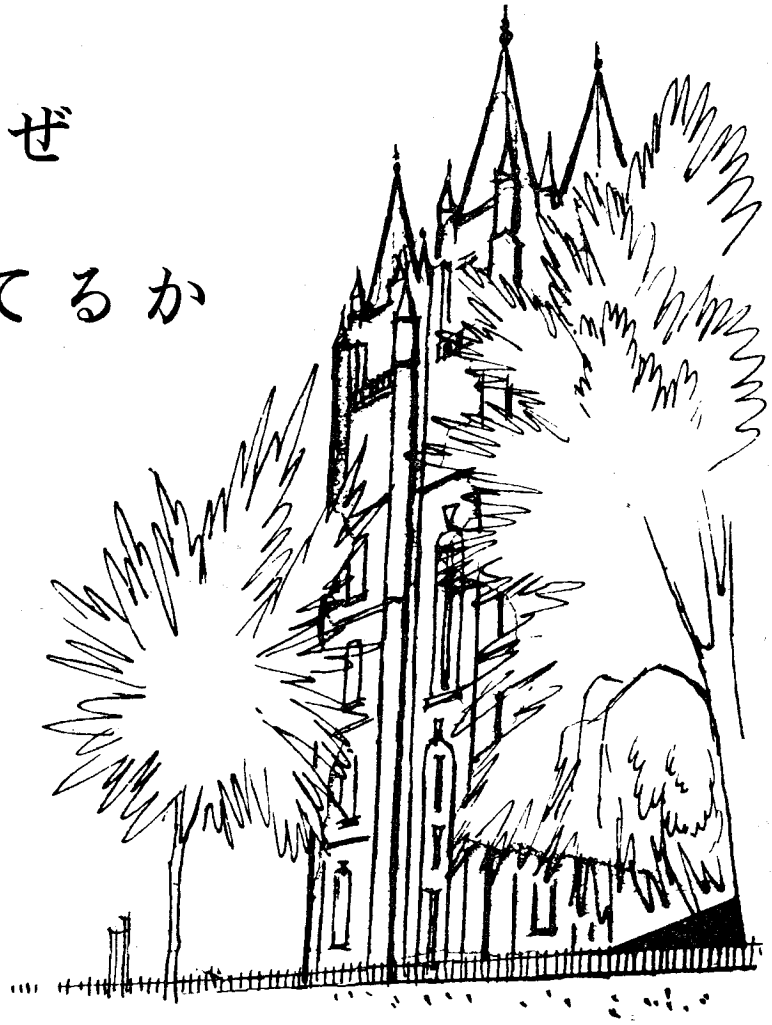
この原則と儀式が回復された時から，福音の祝福を代理の働きによって受け入れる先祖らのために，教会員は先祖の歴史を探して，世界中の記録を熱心に求めてきた。この働きのために教会は大規模な系図の組織を持っているのである。これらの二大目的，すなわち永遠の結婚をし，家族を今も永世にも結び固め，イエス・キリストの福音を受ける機会を持たないで死んだ人々のために王国の扉を開き，その必要な儀式を行うということが，正直な人々に誠心誠意宣べ伝えられる時，真理を愛する人々の心に強く訴えるのである。

さらに神殿の「エンダウメント」があり，これも人の永遠の旅と無限の可能性，義と愛の神がご自身の形に似せてお造りになった子供たちすなわちすべての人類家族のために用意された進歩とに関係のある儀式なのである。

こういうわけで神殿が建てられる。神は，すべての義を包含して，慈悲と栄光に満ちた永遠の計画を教える回復されたイエス・キリストの福音を，私たちにお恵みくださったのである。その福音は一人一人を神の御前で愛する人々と共に永遠に集わせ，現在も未来においても神の至高の可能性へと導く偉大な救いと高貴な儀式とを知らしめて，人生の目的と意義のすべてを包含している。

私は教会のすべての会員，その子供たち，そのまた子供たち，そしてあらゆるところにいるすべての人たちが，この神の家の栄光を少しでも見ることができるように，また，イエス・キリストの永遠の福音の原則を理解する知恵と，それを活用する力とを持たれるように，そして地には平和，人には善をもたらす霊性が発展するように心からお祈りするものである。（スイス神殿献堂式その他の話より）

モルモンはなぜ神殿を建てるか



十二使徒評議員
マーク　E. ピーターセン長老

末日聖徒イエス・キリスト教会の建てる神殿を訪れたり，その写真を見てあなたはなぜそのような建物を建てるのか疑問に思ったことがあるだろうか。

それらの神殿は世界の他のどのような建物とも違っている。もちろん他の人々は美しい建物を建て，そのうちのあるものは神殿とも呼ばれているが，モルモンの神殿のような目的と機能を持つものは他にない。

末日聖徒はなぜ神殿を建てるのか。それはどのように使われるのだろうか。礼拝や儀式のためだろうか。その中ではどんなことが行なわれるのだろうか。末日聖徒が時間と努力とお金を払って神殿を建ててきたのはなぜだろうか。

一世紀以上もの間，末日聖徒は神殿建築の仕事をし続けてきた。その仕事は初めにアメリカ合衆国の中西部にある二つの神殿を建て他に二つを計画した予言者ジョセフ・スミスによって始められた。

西部へ移っても，末日聖徒はこの働きを続け，ユタへ到着して数年の間にそこで四つの神殿を完成した。その時から彼らは，アイダホ，アリゾナ，ロスアンゼルス，アルバータ（カナダ），ハワイ，スイス，イギリス，ニュージーランド，オークランドに神殿を建ててきた。1970年にはもう二つの神殿がオグデンとプロヴォに完成される予定である。

それは漠大なお金を必要とする仕事である。教会員たちは景気が良くても悪くても，困窮と苦悩の淵にあっても，常に礼拝と感謝の

精神でその働きを行なってきた。なんとなればそれは神の御意に従うことだからである。末日聖徒は予言者ジョセフ・スミスを通して主イエス・キリストの完全な福音が地上に回復されたと宣言している。古代の福音に含まれるすべてのことがらはこの回復を通して現代の人々にも与えられたのである。

聖書の時代に聖なる儀式は古代イスラエルの霊的救いのために聖い建物の中で執行されていた。そのために使われた建物はユダヤ人の教会堂や普通の礼拝所ではなかった。その建物は特別な目的のために特別に建造されたのである。人々が荒野を旅している時彼らは持って旅のできる幕屋を使った。

この幕屋は「主の神殿」と呼ばれて，サムエルの母はそこへ行き祈った。（サムエル記上１：９）流浪をやめ，政体を整えて落着いた時，彼らはエルサレムに輝やかしい神殿を建てたのである。

聖書の時代と同じように，主は再び私たちの時代に，信じるすべての者の救いの儀式をそなえられ，それらの聖い儀式を行なうための神殿を建てるようにとお命じになった。

古代に主の救いの祝福を得るため，一人一人に次の二つのことが必要とされた。

(1)主の誡命に述べられた義しい生活をする。

(2)真の権能を与えられた主の僕によって執行される救いの儀式を受ける。

これらの儀式のいくつかはどこでも行なわれるものだが，他のものは特に聖い儀式であり，初期には幕屋や神殿のような特別に建てられた建物で，さらには大きな神殿で行なうようにと主は要求されたのである。古代の神殿でも神権者が聖なる儀式を行なっていた。すべての者でなく，ただ資格をもった者だけがそこに入れるのである。権能をもたない祭司は神の怒りをこうむった。神聖な儀式はまだ世の人々に完全に知らされたことはなかった。そこで行なわれた儀式は非常に聖いものであって，すべての儀式に参加できたのは選ばれた信仰深い人のみであった。

福音がこの末日に回復されて，神殿建設とその儀式も予言者ジョセフ・スミスを通じて回復された。末日聖徒は予言者によって，ただ「天上の津法に従い，すべての津法にも従うこと」を通してのみ，日の光栄を永遠の世界で自らのものにすることができると教えられている。

1844年４月８日予言者ジョセフは神殿の儀式を与えられた時それらは非常に重要なものであって「それなくして我々は天の王座を得ることができない。その目的のために準備された神聖な場所がなくてはならないのである。」（教会教義歴史６：318～20）と人々に語った。

それであるから神殿なくして祝福の数々が与えられないのでありその結果聖徒たちは神殿を建てなければならなかった。これは主により行なうように命じられた誡命である。

聖徒たちは団結してその働きを始め，最初の神殿をオハイオ州カートランドに建てた。それは，1836年に献堂されて今も建っているが，今は教会のものではない。

カートランドの神殿はただ多くの聖い儀式を啓示するためその準備に使われた。それはただ準備であり神殿の仕事の大部分は他の神殿で行なわれるようにとっておかれて，この神殿は後に建てられた多くの神殿と同じものではなかった。たとえば，バプテスマフォントや永遠の結婚の部屋や他の重要な儀式のための部屋はなかった。カートランド神殿は主として礼拝のために建てられたのである。

聖徒たちはカートランドから迫害を受けて追われ，神殿は後に残された。彼らはミズーリ州ジャクソン郡に住みつき，そこに神殿用地を奉献したが，迫害によってその建設はさまたげられた。後にインデペンデンスからそう遠くないミズーリ州ファーウェストに家を建て，その地域に三番目の神殿のために礎石を築いた。だがそれも再び迫害によって妨害されてしまった。

予言者ジョセフ・スミスのもとにイリノイ州ノーヴーへ移動している時，彼らは四番目の神殿の礎石をおいた。その時は予言者とその兄弟である大祝福師ハイラムを迫害し苦しめた敵による攻撃を受けたけれどもついに完成した。

ユタの平原を横断しながら末日聖徒は迫害にも屈しない熱意をもって神殿を再び建てたのである。彼らは神の御前で救いを願った。末日聖徒は神殿の儀式が救いに欠かせないものであることを理解しそれがために儀式を受ける建物の建設に努力をいとわなかったのである。

しかし神殿は人の救いにとってどのように欠かせないものなのだろうか。それは古代においても同じであったであろうか。エルサレムの教会は古代イスラエルの宗教生活にどのような役割をはたしていたであろうか。

エルサレムの神殿はユダヤ人の教会堂よりももっとよく築かれていた。

そしてそこが神権者だけが式をとり行なう聖い場所であるということも認められていた。その「至聖所」は最も信仰深い者のために備えられていたということもよく知られている。教会堂における一般的な礼拝に関係のない聖い儀式がそこで行なわれたこともまた事実である。そしてそれらはただ興味だけを持つ人々や信じない人々が参観するために開かれてはいなかったことも知られている。

エルサレムの神殿はそこへ入った資格のない者によって汚され，イエスの時代には売買いの家となった。

それは救い主が彼らを神殿から追いたて『わたしの家は祈りの家ととなえられるべきである』と書いてある。それだのにあなたがたはそれを強盗の巣にしている。」（マタイ21：13）と言われたことによってわかる。

末日に建てられた神殿も同様に神聖なものであるから，それらも教会の最も信仰深い者たちのために備えられているのである。

では神殿の内部では何が行なわれているのだろうか。一般の参観がなされていないことについてなぜだろうかと興味をもつ人々が多くあるに違いない。

神殿が建てられている時は公衆の視察は自由であり，何千という人々がそこを訪れその美しさに驚嘆する。しかし建物が献堂され，神殿の仕事が行なわれるようになると旅行者は入ることが許されない。

神殿が献堂される前にやって来た訪問者は各部屋を見てまわって皆感嘆の声をあげた。興味の中心となるものは，いつもバプテスマフォントである。各神殿には一つずつこのフォントがあり，石やブロンズでつくられた12頭の牛の背に乗っている。これは予言者ジョセフ・スミスの時代に，他のことがらと同様に，ジョセフ・スミス

を通して主が指示された様式に従っているのである。

なぜ神殿内にバプラスマフォントがあるのだろうか。人々はどこででもバプテスマを受けられるのではないだろうか。

生きている人々はどこにおいてもバプテスマを受けられるが，神殿内のフォントは死者のための代理のバプテスマを行なうように設けられている。

死者のためのバプテスマとは何か。

それはキリスト教の教えであろうか。

ヘブル人への手紙の中で，私たちは信仰ある人々の祖先について読むことができる。パウロは述べている。「わたしたちをほかにしては彼らが全うされることはない。」（ヘブル11：40）

ここに生者と死者の救いの間には明確な関係のあることが示されている。多くの人々は死者のための代理の働きを信じてローソクをともし，死者のために祈る。

キリストご自身の贖いは代理の働きであった。キリストは私たちのために死んでくださり，それがために私たちは生きることができるのである。キリストは苦しみを通して私たちの罪を贖ってくださった。

「神はそのひとり子を賜わったほどにこの世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで永遠の命を得るためである。」（ヨハネ　3：16）

「彼はわれわれのとがのために傷つけられ，……その打たれた傷によってわれわれはいやされたのだ。」（イザヤ　53：3～12）

「また多くの人のあがないとして，自分の命を与えた。」（マタイ20：28）贖いの供え物として命を与えたのである。「御子イエスの血がすべての罪からわたしたちをきよめるのである」（Ⅰヨハネ　1：5～7）

「あなたはほふられ，その血によって人々をあがない……」（ヨハネ黙示録　5：9～10）

死者のための代理の働きは聖書の教えでありキリスト教の教義である。人がそれにあずからねばならないとしたら，その人々はどのような働きが神に受けいれられるかをはっきり知らなくてはならない。明らかに，人によって作り出された方法は認められない。このことをはっきり知るために，私たちは生きている者の救いに何が要求されているかを考え，また主は死者の救いのために何を要求していらっしゃるかということを考えてみなくてはならない。どのようにして生者は死者の救いの助けをなすことができるのか。聖書では何と言っているだろう。

ローソクをともすとよいのだろうか。祈禱すればよいのだろうか。東洋で行なわれているようにただ墓に供物をそなえればよいのだろうか。

福音を知らずして死んだ人々も神の御前に救われることができる。それは聖句でも明らかにされている。ではそれはどのようにしてなされるのだろうか。これが大切な問題である。

イエスは死者に宣べ伝えられた。使徒ペテロは救い主の死後，その肉体が墓に横たわっていた間に，その霊は死人たちのところへ行き，そこでかつて地上に生活していた人々の霊に宣べ伝えられたと書いている。（Ⅰペテロ　3：18～20）

更にペテロはそのように言った理由を述べている。「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは，彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが，霊においては神に従って生きるようになるためである。」（同上　4：6）

これらの聖句は次のことを教えている。

(1)イエスは私たちと同じように霊と肉体をもつ一人の御方である。

(2)イエスが死人のところへ行った時，霊ははりつけにされた骨肉の身体から離れていたが，なおも謙遜な「ナザレの大工」としての個人であった。

(3)死人もまた，ノアの洪水で死んだ人々でさえも，イエスご自身と同様に，英知のある個性をもった霊の存在であった。

(4)これら死人たちは霊界に住んでいるにもかかわらず，生きている人と同様に福音を聞くことができるように，理性や精神能力を充分豊かに持っており，彼らは生きてキリストの教えを受け入れるか拒むか選択の自由を使うことができた。

(5)イエスは救いのもといとなる福音を死人に教えられた。

(6)福音を聞いて死人はそれを受け入れることも拒むこともでき，それによって「肉においては人間としてさばきを受ける」のであり死人がそれを受け入れた時に，聖句が示すごとく「霊においては神に従って生きるようになる」のである。

さて生きている人々の救いのために福音は何を要求しているのだ

ろうか。

彼らは肉にある間に，水に沈められるバプテスマのような救いに必要な儀式と律法を守り「神に従って」生きなければならない。

バプテスマは必要だろうか。

イエスは必要だとお考えになり自ら「すべての正しいことを成就するために」バプテスマをお受けになったのである。（マタイ　3：15）まして人にはバプテスマが必要である。

イエスの弟子たちはバプテスマのヨハネが行なったよりも多くのバプテスマをした。（ヨハネ　4：1～2）またバプテスマを信仰そのものと同じく救いの本質的なものとして「信じてバプテスマを受ける者は救われる」（マタイ 16：16）と教えられたのはイエスである。では私たちはバプテスマを無視することができるだろうか。

バプテスマが生者の救いに欠くべからざるものであるなら，それは死者の救いにも欠くべからざるものではなかろうか。私たちはローソクをともしたり祈ってあげたりして，バプテスマの代りにすることができるであろうか。

では死者はどのようにしてバプテスマを受けられるのか。歴史で明らかなように初期のクリスチャンたちは死者の代りに生者にバプテスマを授けている。それは慣行されておりパウロの時代もそうであった。パウロはこの初期のキリスト教の慣習を死者の復活の証拠として語った。復活を疑っていた人々に彼は「そうでないとすれば死者のためにバプテスマを受ける人々は，なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば，なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか」（Ｉコリント　15：29）と説いたのである。

これは死者の救いに関するまことのキリスト教の教義である。生者のために行なわれていたと同じ儀式が死者のためにも行なわれていた。それは目新しいことではない。神は死者と生者に違ったことを要求しておられなかった。神は彼らを全て同じように扱っており彼らがたとえ霊界に住んでいようとも，ペテロの言ったように肉における人間と同様に死者を裁かれるのである。

死者に福音が宣べ伝えられたので，その儀式を死者に代って行なうことが可能となった。

バプテスマはそれが生者であろうと，死者であろうと変りなく，水に沈めることを要求する儀式である。死んだ者に一人ずつバプテスマを施こすことはできないので，生きている人々が彼らのために代理としてバプテスマを受けるのである。

この末日に回復された福音の一部として，主は予言者ジョセフ・スミスにこの教義となすべきことを啓示され，その儀式を行なうために神殿を建てるようにとお命じになった。

聖徒たちはイリノイ州，ノーヴーに住んでいた。彼らは主の命令に心をとめ，その町に神殿を建てようと準備し，最初はフォントを築くために建物の低い部分の完成をめざして，そこに代理のバプテスマを執行するための美しい永遠の器を作ろうとした。そのようなものはしばらくたってから完成した。永久的なフォントの準備中は臨時に木でつくられたフォントが用いられたのである。予言者ジョセフ・スミスの指示のもとにそこで死者のための聖い儀式が行なわれていた。

バプテスマはキリスト教のすべての儀式のうちで最も大切なものとして定められた儀式であり，神の子供たちの救いに関する神のご計画に欠くべからざる基本的なものである。だが人々はペテロやパウロの時代以後，バプテスマを忘れるようになり，それを認めなくなっていった。

バプテスマなくして，人はどのように救われるだろうか。すべての人類は神にとって同じ子供たちである。すべての人は平等に扱われねばならず，すべての人は神の御前に救われるために同じ条件に従わねばならない。

救い主ご自身は同じ光の中で全人類をみな重んじられる生者と死者両方の神である。「人はみな神に生きるものだからである。」（ルカ　20：38）と言われた。ゆえに死者のための代理のバプテスマは今の世でも古代と全く同様にいつも行なわれる儀式なのである。

しかし，死者のバプテスマの働きに加えて神殿の中には他の大切な儀式がある。最も忙しい場所の一つは結び固めの部屋として知られているところである。多くの人々の使用に備えて，それぞれの神殿にはそのための部屋が普通５つか６つある。それらの部屋は，ある人々が，キリストの福音の最も根本的な原則とみなしていることを，明らかにしている。

この教義をよりよく理解するために初めに家族生活は末日聖徒に

とって最も大切なものであることをあげなくてはならない。家族は永遠の価値あるものとして重んじられている。夫と妻は死が彼らを分かつまでではなく永遠に結びあうのである。

そのような両親から生まれる子供たちは死や復活をへて永遠の生命へと続く家族の生活の一部となるのである。

幸福で愛に満ちた家庭にもたらされるすべての徳性や祝福を彼らは永遠に持って行くことができる。なぜなら家族生活は天における私たちの存在の一部となるからである。

結婚は決してはかないこの世限りのものとして主が定められたのではない。これは末日聖徒の教義である。結婚は死が人類にもたらされる前に定められた。資格ある人々の結婚が神の力によってその目的のためにとり行なわれた時に，死を越えて続くのである。

最初の結婚はアダムとイヴであり，それは死すべき状態や死がまだなかったエデンの園に住んでいた時に行なわれた。結婚は，死が何の制限も与えることのできない神の永遠の力によって行われたのである。

後にアダムとイヴが主にそむいたためその罪によって彼らの身体は死が入りこむという変化を受けた。すなわち死すべき状態になったのである。しかし彼らの結婚は死に先だち神の力によって行われたから，それは死の後も続く永遠の結合なのである。

他のだれがアダムとイヴのような永遠の結婚をすることができるのだろうか。神の無限の力によつて儀式が執行される時にそれができる。「死が二人を分かつまで」という一般の結婚は，死をもって終る一時的なものである。死が二人を分かつまでと言って式をとり行う人々が死後までも結ぶ権能を持っていないことは明白である。彼らは永遠の結婚を司さどる力を持っていない。しかし，実際にこの世には二人を永遠に結ぶことの出来る力が存在するのである。イエスが天にのぼられる前，使徒たちに彼らが地においてつなぐことは何であっても天においてつながれるという力をお与えになった。（マタイ　16：19，18：18，ヨハネ　6：27，ロマ　15：28，Ⅱコリント　1：22，エペソ　1：13，4：30を参照）

使徒はその力を使っていただろうか。彼らがその神権の権威をもって行うすべてのことは確かに永遠の意味を持っていた。

人がバプテスマを受けた時，その人は永遠の祝福を受けたのである。

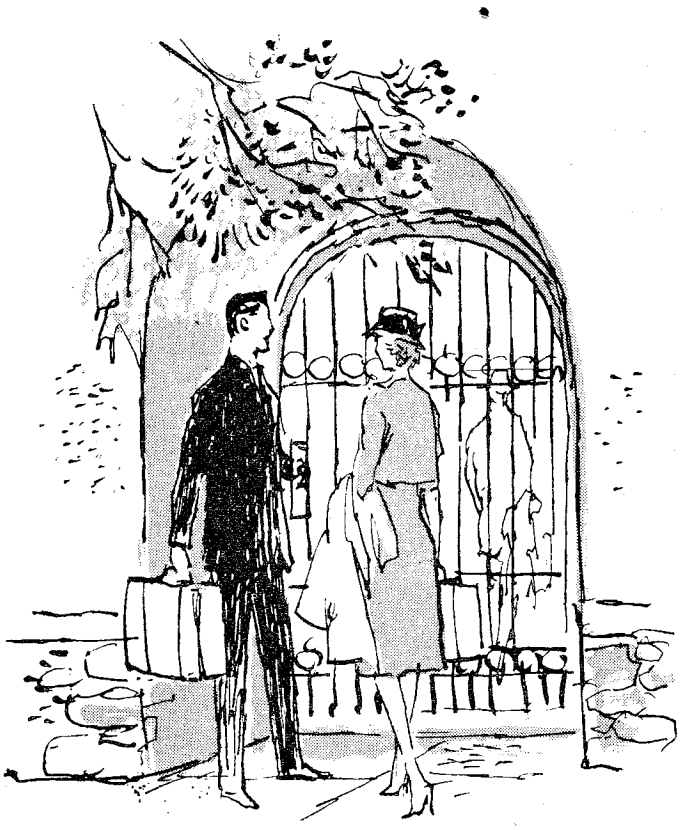
バプテスマはこの世のみであると誰が言えよう。バプテスマは，神の御前での私たちの救いに欠くことのできないものではなかろうか。救いは永遠にかかわる事柄ではないか。これらの聖い権能を与えられた使徒は天においてむすばれる地上の儀式を執行した。それは地で行われる儀式がこの世のみでなく死んだ後神の天なる王国においても効力を持つことを意味している。

それは神のご計画の一部である。

そうでなくてはなぜ，イエスが地上と同様に天でも結ぶ力を使徒にお与えになっただろうか。

この意義は死者に代って行われる代理のバプテスマの原則を考える時にも一層理解できる。ペテロは肉においては人に従って裁かれた人々が霊界において神に従って生きるために，福音が死者に与えられたと言っている。

死者のためのバプテスマは，霊界において「神に従って生きる人々」と，肉において人のためにすえられた標準に従って裁かれる人



々との差別をなくするために用意されている。生者と死者とは救いに関する限り平等であり，それはこの世と来たるべき世と両方に効力をもつ神権の権能をもってなされるのである。

使徒が必要なのは，彼らにはこの世にも来世にも結び固める力が与えられているからである。バプテスマについていわれることは結婚についても云える。結婚は神が定められたことである。（創世記　1：28，2：24～25，9：1，7，35：11，ヘブル　13：4）前に述べたように，全能の神ご自身が，死すべき状態の起こる前に最初の結婚を執り行われたのである。女性であるイヴを男性であるアダムに与えて彼らに生めよふえよ地に満ちよと命令されたのは神である。

この最初の結婚を執行なさった時，もちろん主は神ご自身の永遠の能力を行使された。後に聖任された使徒たちにその能力の幾分かを与えて，行う儀式が永遠に効力を持つようにされたのである。

この永遠の能力がバプテスマの恵みを永遠にしている。この同じ能力がバプラスマを定められた同じ御方によって命令された結婚に永遠性を与えられない理由があるだろうか。

結婚も神の権能によって定められた永遠に続くものでなくてはならぬし，事実確かにそうなのである。夫と妻は今も永世にも神権の力によって共に結ばれることができる。また同様に子供たちは永遠

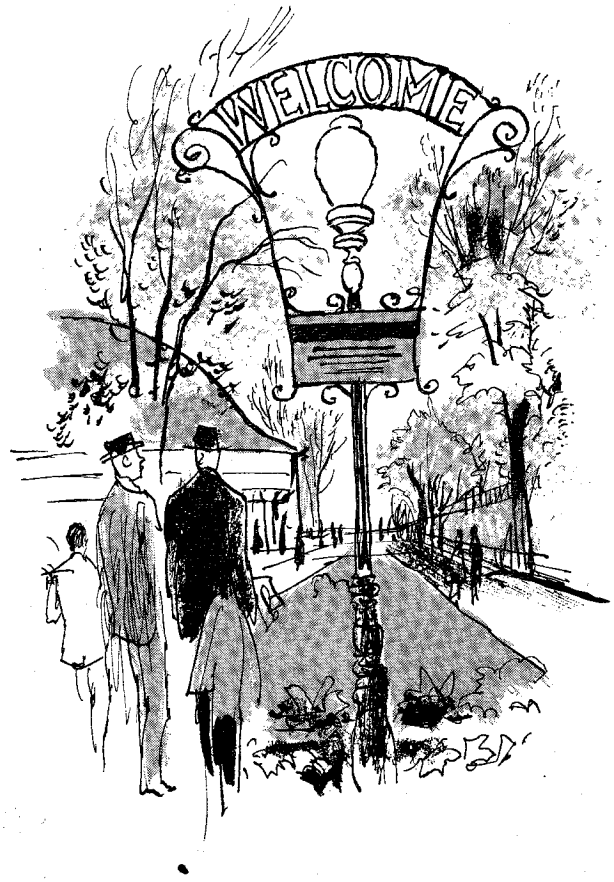
にその両親に結ばれ，家族は永遠に共に結びあうのである。愛しあう夫と妻はそのきずなを死によって断つ必要がない。子供たちもみなし児ではなく，とこしえにその子供たちである。

バプテスマによって人が神の御前に出ることができるように，この結婚の結び固めの儀式によって人は神の御前に結合した家族として立つことができるのである。

もし私たちが愛する人たちを奪われ，人生の最も聖く愛に満ちたきずながひどくそこなわれるとしたら，一体天は誰にとって完全なところとなろうか。

神は愛である。神は愛を永えに保っておかれる。私たちの家族関係は愛の上に打ちたてられるのである。そのようなきずなを定められた神はそれを神の王国でもとっておかれる。私たちの神殿には結び固めの儀式を行う，シーリングルームと呼ばれる部屋がある。その神聖な部屋で花嫁と花婿は聖壇に膝まづき，聖なる婚姻の儀式のうちに永遠に結び固められるのである。まだ結び固められていない両親は，家族が聖なる神権の力によって永遠に結ばれるように，その子供たちをシーリングルームへ伴っていくことができる。

しかし，もうこの世にいない多くの家族はどうであろう。この世を去った夫と妻は，死が結婚のきずなを断ち切っていても再び共に結びあうのだろうか。「死が二人を分かつまで」と執行された結婚は，永久不変の基いの上にまた立つのだろうか。死んだ子供たちは家族が来世において共に結ばれるために死んだ両親のもとに再び戻るのだろうか。



地上と天上で結ぶ力は，この世でも来たるべき世でも力のあるものであり，生者と死者のための必要な儀式を与えている。「霊においては神に従って」生きる人々にバプテスマという贖いの力を与えられたと同様に，生者が死んだ愛する人々の代理として行う，死者のための結婚の結び固めの儀式も与えられている。

だれがこの代理の働きをするのだろうか。だれでも参加できるのだろうか。

もう一度申しあげたい。主の家は秩序の家である。神に関して，混乱はいささかもない。すべてのことがらは秩序正しく行われるので，人は自分の血縁の死者のためにこの働らきをするよう定められている。

ではそれはどのように行われるのだろう。死者に血のつながっている人々よりも彼らをよく知っている人はいるだろうか。彼らに関心をもっている人々は一体だれだろうか。彼らを助けたいと心から願う人たちはだれだろうか。

死者をどのようにして助けることができるのか。死者の身分を証明するために自分の系図を準備しているすべての家族は，死者のための儀式を行う必要がある。

正しく調べられた死者の儀式は主に認められる。主はその目的のために特別に建てられた家で儀式のすべてがなされるように備えておられる。それが神殿なのである。

なぜ末日聖徒は神殿を建てるのだろう。神殿の中において，自分自身のために結び固めの祝福を受け，血縁の死者その他のためにはペテロの言ったように「肉においては人間の標準と機会に従って裁かれるが，霊においては神に従って生きる」ことを得させるように代理のバプテスマと結び固めを行うのである。

このことについてジョセフ・スミスはある時人々に語った。「……この目的のため，死者のバプテスマを受ける人々のために特別な場所を建てなくてはならない。……なぜならその父，母，兄弟，姉妹，友人などを救いたいと願う人々は，その人たち一人一人のために，自分と全く同じようにすべての儀式を受けなくてはならないからである。」（教会教義歴史　6：318～320）

では近代におけるその働きの始まりはどのようだっただろうか。その働きは何をもととして始まったのだろう。

偉大な聖書の予言の一つは「主の大いなる恐るべき日」の来る前に末日において地を訪れる古代の予言者エライジャの近代における使命について述べている。エライジャの訪問は聖句が示すごとくに重要なものであり，もしそれがなかったら地はのろいをもってうたれるのである。

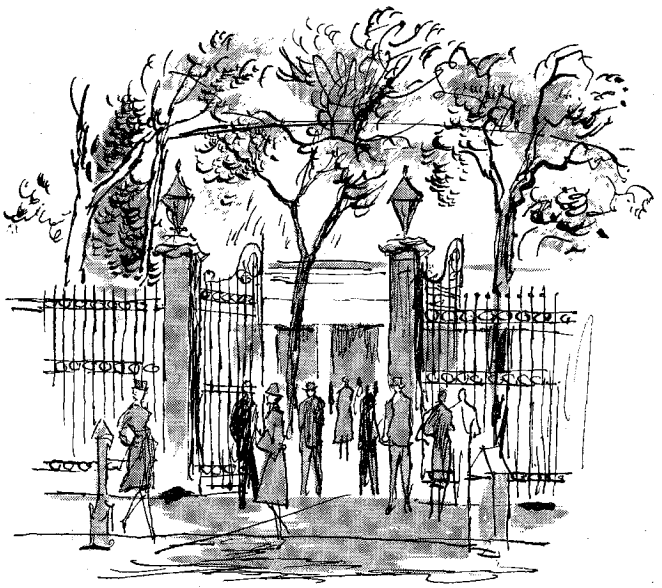
マラキはその最後の数行にこの予言を記した。

「見よ，主の大いなる恐るべき日が来る前に，わたしは予言者エライジャをあなたがたにつかわす。」

「彼は父の心をその子供たちに向けさせ，子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て，のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである。」（マラキ　4：5～6）

この予言については二つの大切なことがある。

まず第一に時が限られている。マラキは，エライジャが主の大い



なる恐るべき日の前に地上へ来ると言っているのである。時のしるしによって私たちはエライジャのおとずれが近いことを知る。この同じしるしによって，エライジャが私たちの時代のためにとっておかれたことを知ることもできる。

エライジャの来訪は将来のことなのかもうすでにあったのか，そうだとすれば，だれのところへ来たのかという質問が出てくる。ではマラキの予言の第二の大切な意味を考えてみよう。エライジャはなぜ来るのだろうか。

マラキはエライジャの使命をはっきりと述べている。それは「子供たちの心をその父に向けさせる」ため，今の人々と過去の人々の間で重要なきずなをつくることである。言いかえれば，エライジャの訪問の明らかな目的は生者の心に祖先への関心をおこさせることだったのである。聖句によりこのようにはっきりと示されている目的をもってエライジャはすでに来たのかという問題が残る。そのためにまず私たちはこの質問について考えなくてはならない。最近人々の間に死者についての関心が高くなり世に広がったことはないだろうか。

もし調査をしてそのようなことが全然なかったなら，エライジャがまだこの世を訪れていないことは当然であろう。一方もし現に系図の活動が世に広まっているとしたら，それはエライジャがすでに来たという直接の証拠になる。

それにより彼の使命の結果があらわれており，確かに彼が来て，その仕事が始められ，予言は成就されたと知ることができるに違いない。

はたして実際はどうだろうか。

系図への関心は実際高まってきている。それは現代に始まって，現在西洋のほとんどすべての国々で生者の心をその祖先に向ける系図活動は世に広まっている。系図を準備するというはっきりとした目的をもつ何百という団体が近代になって組織されてきており，何十万という個人が自分の先祖の記録の探求をしている。また政治家や軍人や開拓者のように名誉ある家系を持つことを入会資格とする愛国と伝統を守る団体が作られてきている。

多くの国々で系図に関する本や雑誌が出版され新聞には系図の記事が載る。

いろいろな国の大きな図書館がもっぱら系図資料や家系歴史の資料のために建てられている。

そのデータについて何十万の本が19世紀の間に出され，その種の印刷物を多くの人々が要求するようになったために，アメリカ合衆国の多くの市の公共図書館が系図専門家に託して，系図部門を新設しなくてはならなくなった。

マイクロフィルムという方法によって世界の多くの国の記録が次々に複写され保存されている。現在これらのマイクロフィルムによる記録はリーディングマシン（判読機）を通して人々に使われ，豊富な系図資料を提供している。

イギリス，フランス，ドイツ，スェーデン，デンマーク，ノルウェー，スコットランドその他，ヨーロッパの国々では，政府が系図資料を保存し，それに必要な古い記録を備えるように命じている。

さて，訪問によってこのような関心をもたらしたエライジャは「主の大いなる恐るべき日」の前，末日にあらわれる，と予言者が記している。よってこの広範な系図活動が近代になってから始まったのかどうかを調べなくてはならない。特に先祖を研究する団体やそのような目的についての項目はどんな百科辞典にも見られる。

彼らの活動は，家族の歴史や系図の準備よりさらに多く，「子供たちの心」がその父に向けられていることを示している。歴史的建造物を保存したり栄光ある先祖の地に記念碑を建てたり，墓石を刻み，記念公園を作ったりすることにその関心が表われている。

あるものは1850年頃からであろうが，これらの団体の多くは1890年頃にできている。

実際には祖先に特別の関心をもつ組織的団体としてまとまる何年か前から個人個人が興味を持ち始めていたのである。

系図に対して世界的に非常な関心が高まってきていることやそれが1844年の数年前に始まったことを示してきたが，聖句によればエライジャはその関心を起こすはずである。エライジャは予言に従ってその時代に活発な動きを始めるため1844年より何年か前に来たに違いない。

事実そうであった。

ペテロの第一の手紙にノアの時代の洪水に言及する句がある。「その箱舟に乗り込み，水を経て救われたのは，わずかに８名だけであった。」（Ｉペテロ３：20）

それはちょうど1844年の「わずか８年」前だった。エライジャはマラキの予言を成就して地を訪れたのである。

オハイオ州カートランドに末日聖徒イエス・キリスト教会によって建てられた神殿の中で1836年４月３日エライジャは死すべき人間の前にあらわれた。彼はそこで教会の予言者であるジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリに天からの能力を授けたのである。この訪

れの際エライジャは自分はマラキの言った予言，すなわち子供たちの心をその父に向けさせるため，言いかえれば死すべき人間にその祖先の系図への関心を起こすために来たと述べた。

エライジャが現われたという証拠があるだろうか。

系図団体，図書館，雑誌，あらゆる系図の記録，あらゆる系図の頁にある名前，及びアメリカやその他多くの国々で死者の探求にたずさわる人々が，エライジャが来たことの現実の証人である。なぜなら，それぞれがマラキにいわれた「子供たちの心をその父に向けさせる」という予言者の使命を成就しているのである。エライジャの使命はすべて私たちに関わるものである。証拠は明白であり，疑いの余地はない。エライジャはすでに来た。偉大な予言の一つがこうして成就されたのである。主の大いなる恐るべき日の近いことを証するこの出来事は時のしるしのうちでも最もはっきりしているものである。

この広範な系図への関心はエライジャの訪れを証しするだけでなく近代において彼の訪れを受けた人々の神聖な召しをも証しているのである。それはあのカートランド神殿の中でエライジャの訪れを受けた人が全能の神に選ばれたということをもさしている。

神の啓示を通し天使によって権能を付与されて，彼らは末日聖徒イエス・キリスト教会を組織し，地上にキリストの福音を完全な形でもたらしたのである。彼らはバプテスマのヨハネやペテロ，ヤコブ，ヨハネから神権の聖任を受け，この力によって彼らは再び回復された福音を純粋なままに説いた。

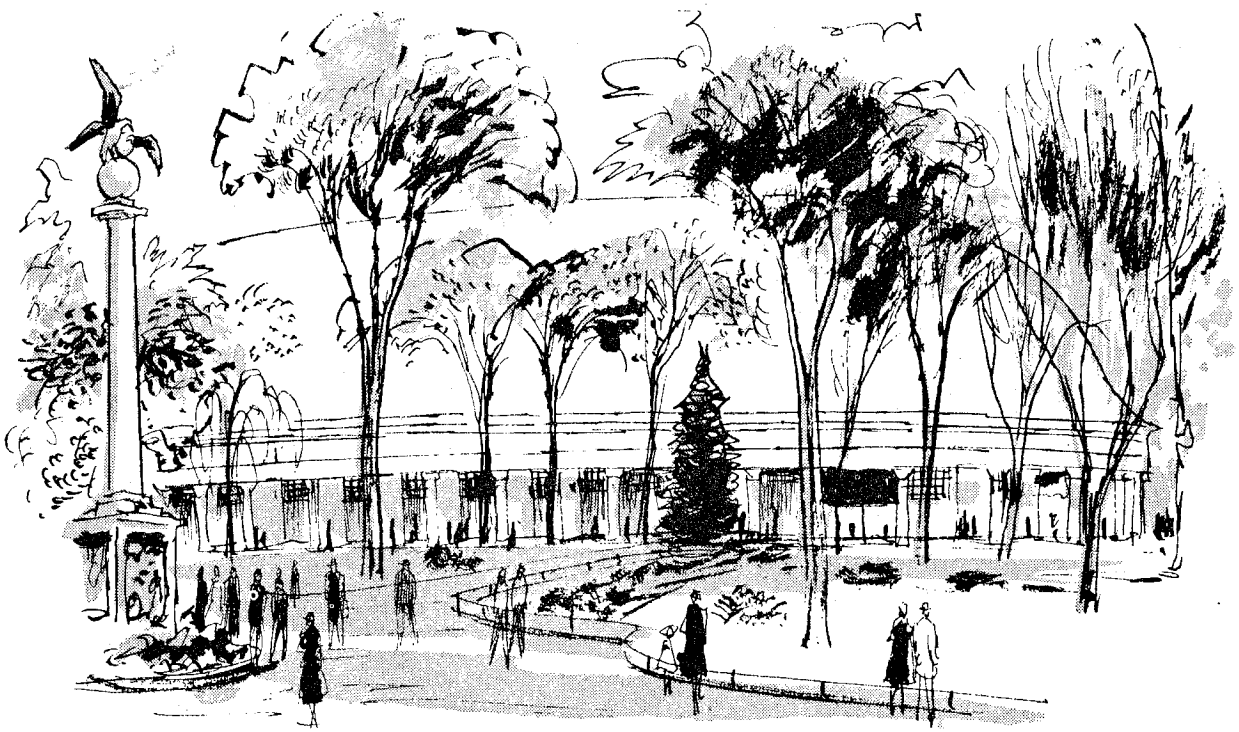
彼らはエライジャの訪れの目的と子供たちの心をその父に向けさせる理由を説明した。

彼らはこの系図に対する関心が救いの計画のうちに大切な位置をしめており，キリスト教の根本に密接な関係をもつものであると教えたのである。

私たちは近代におけるエライジャの使命の結果として，地上におきた活動に二重の意味を認めることができる。一つはかって地上に生きて現在は霊界にすむ人々にとって必要な証明を準備するために全世界にわたって人類が家族の歴史や系図を調べることであり，もう一つは末日聖徒イエスキリスト教会の会員たちが，キリストに来るすべての人々がその王国で救われ得るために，神殿で福音の命ずる聖い儀式を行うということである。

この神殿での働きは，全世界にわたる系図探求を通して準備される証明なしに行うことができない。この二つの活動は予言者ジョセフ・スミスによって始められ，現在はそれを継ぐ人々によって行われているように，主の御業を完成させるために手をたずさえて行われてゆくものである。

これがモルモンの神殿を建てる理由なのである。



神殿を仰ぎ見て

前十二使徒評議員

ジョン A. ウィッツォー長老 (1872～1952)

神殿は主の住みたもう家である。

主は地上を訪れたもう時，その神殿においでになる。私たちは主の家族であり，前世において主の子供たちであった。ゆえにこの地上の両親と家族が家庭に集まるように，主の家族の中の価値ある会員は主の家に集まることができるのである。

神殿は教える場所である。ここで福音の原則が説かれ，神の王国の深い真理が開かれる。正しい精神を持ち注意深く準備をして神殿に入る時，私たちはそこで知恵と知識を豊かに与えられる。

神殿はやすらぎの場所である。騒がしい外界の心配やわずらいをはなれて，神殿内では，ただ霊の事柄だけに関わるので，私たちの心は霊的なもので占められる。

神殿は誓約の場所である。それは，私たちが正しい生活をする助けとなる。ここで私たちは神の律法に従い，自分自身の祝福と人の善のために，福音の貴重な知識を用いることを約束するのである。人々は儀式を受けることにより，福音の恵みにふさわしい人生を全うしようという強い決意を抱いて神殿から出てくるのである。

神殿は祝福の場所である。私たちの持つ信仰にのみ基いて今から永世にもわたる約束がなされ，その約束によって私たちは天の両親が近くにあるということを理解する。神権の力はそのように新しく，豊かに私たちに与えられるのである。

神殿は信仰厚い人たちに儀式を施す場所である。人間の力では答えられない多くの問題について，人生の偉大な奥義がここで明らかにされる。(1)私はどこから来たか。(2)なぜここにいるのか。(3)死後どこへ行くのか。ここでは人生のあらゆる事柄の源である霊的な欲求が最も重要なものであるとみなされるのである。

神殿は啓示の場所である。主はここで啓示を与えたまい，すべての人は人生において助けとなる啓示を受ける。

すべての知識，すべての助けは直接または間接的に主から来るものである。

主は人としてこの世におられないが，聖霊や，地上にあって神権を持つ人々を通して，この地上にご自身をあらわされる。その御霊によって人々はこの地上における主の御業を指図しているのである。祈りと信仰をもって，この聖い場所へ入るすべての人々は人生の多くの問題を解決する助けを得るであろう。

神権にかかわる導き，平和，誓約，祝福，啓示を受ける場所である主の神殿に入ることはまことに有益なことである。この特権に対する感謝と，霊的な機会を得ようと願う熱意が私たちの心に満ちあふれてくるにちがいない。

賜物と祝福にみちた神殿はイエス・キリストの福音の要求に従おうとするすべての人々に開かれている。資格ある人々はみな神殿に入るための推薦を監督（支部長）に願い出ることが出来る。

そこで行われる儀式は神聖なものであるが，不可思議なものではない。福音を受けいれ福音に生き，自分自身を清く保つ者はみなその儀式を受けることができる。実に教会の信仰深い会員はみな神殿に行きその特権を享受するようにすすめられている。神殿は，祝福を受けるにふさわしく，自らを高めた人々すべてに儀式が施こされる神聖な場所なのである。

福音に関することは，なんでも神殿で行われる。バプテスマ，神権の聖任，結婚，生者と死者のための今と永世にわたる結び固め，生者と死者のエンダウメント，福音の釈き明し導きと教えを施こす働きに関する会議，その他福音に属するすべてのことがそこで行われる。実にすべての福音が神殿内に要約されているのである。

初めて神殿に入る人にその儀式が，充分理解されることは期待されていない。だから何度も神殿に入るように，主は方法を備えておられる。神殿の仕事はまず最初に自分自身のために行われ，それから亡くなった祖先や友人のためにできるだけ多くなされなくてはならない。この働きは死者のために救いの扉を開き，エンダウメントの特質や意味や義務を生ける者の心にとめさせるものである。エンダウメントをいつも新鮮に心にとどめておくことによって，私たちは永遠の祝福を受けつつ人生における義務を，より良く遂行できるであろう。

神殿の儀式については教義と聖約124章39—41節の啓示の中で述べられている。「この故に，われ誠に汝らに告ぐ，汝らの灌油の儀，汝らの聖なる洗い，死者に代る汝らのバプテ

スマ，汝らの聖会またレビの子らに由る汝らの捧物の記念，神よりの交通を受くる最も聖き所に於ける汝らの神託，汝らの律法と審判，啓示の始まりと，シオンの基と，シオンのすべての市制の栄と誉とエンダウメントは，わが聖き名のために建てよとわが民の常に命ぜらるるわが聖なる宮居の儀式によりて制めらるるなり。」

「われ誠に汝らに告ぐ，われその中にてわが民に儀式を示さんがためわが名のためにこの宮居を建てよと。」

「われ創世の前より隠されたること，すなわち時満ちたる神権の時代に関することをわが教会に示さんと図ればなり。」

神殿の中ではすべての人が白い装いをする。白は純潔の象徴である。清らかでない者はだれも神の家に入る権利はない。さらにすべての人が統一された服装をするのは天で父なる神の御前にあってすべての人が平等であることを象徴している。富める者も貧しい者も，学問のある者もない者も，地位のある者もない者も，霊の父である主なる神の前に義しく生きるならば，神殿内ではすべて平等で同じ価値をもって，肩を並べる人が神殿内で受けるものは霊的な理解と，霊の健康であり，そのような人々は主の御前にみな平等なのである。

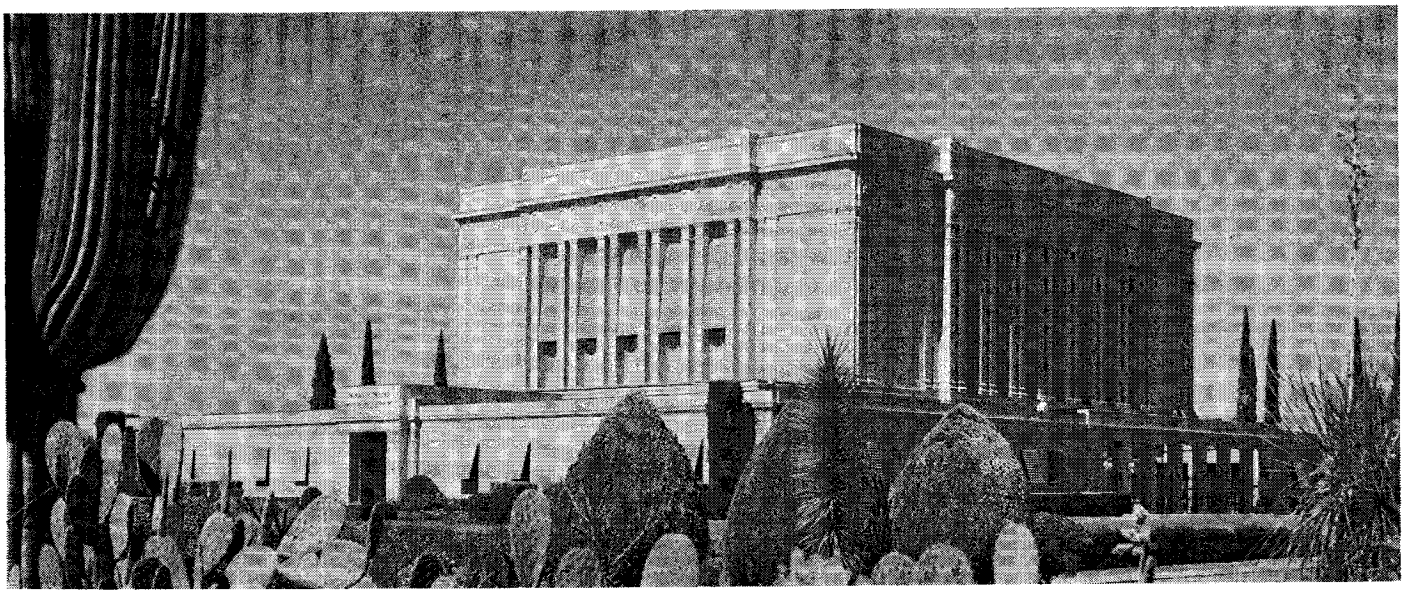
最初から最後まで神殿内を通りぬけることは輝しい経験である。それは人の心を高め，勇気を与え，人を益するものである。神殿に入った者は知識が増し，御業に働く力を強められて出てくる。

神殿のおきてとエンダウメントの聖約は美わしく，有益で簡潔で容易に理解できるものである。この世の教育を受けなかった予言者ジョセフ・スミスが人の霊的成長のための基をこのように立派にすえられたことは奇蹟であろう。このこと一つをとってもジョセフ・スミスが死すべき人間の力を越えた能力によって導かれたことを証詞している。

全き従順と信仰を持って主の御意志に従おうと願い神殿の奉仕に参加する人々にとって，その日は輝やかしい経験となる。そしてその人々に光と力とが与えられ，未来に必要とされるあらゆる事柄に助けとなるであろう。

主なるイエス・キリストの啓示された福音に私たちが目を向ける時，ことに神殿に目を向ける時，末日における特別な目的をもって神の御業が再び打ち建てられたことの確信がより強められる。

神殿での奉仕はこの力ある業，まさに「人に不死不滅と永遠の生命をもたらす」（モーセの書1：26）業にふさわしい力を与え，私たちを助けてくれるものなのである。



パトモス島のヨハネは将来を予言した。
「わたしは，もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者，すなわち，あらゆる国民，部族，国語，民族に宣べ伝えるために，永遠の福音をたずさえてきて……」（ヨハネ黙示録14：6）

啓　　示

ドイル　L. グリーン
イムプルーヴメント・エラ主筆

神とこの地上に住む神の代表者との間に交わりや連絡のあることが，常に真の神の教会に伴うしるしとされてきた。

主は，エデンの園でアダムと共に歩み彼に語って以来，旧約の時代からずっと予言者たちを通して民のなすべきことを教えてこられた。エノク，ノア，アブラハム，ヤコブ，モーセ，ダビデ，イザヤ，ダニエル，そしてマラキも，旧約の予言者たちは皆，主の導きを受けた。

予言者アモスは大いなる真理を述べている。

「まことに主なる神はそのしもべである予言者にその隠れ

た事を示さないでは，何事もなされない。」（アモス3：7）

ソロモンもそのことを明らかにして言った。

「予言がなければ民はわがままにふるまう，（英語ではperish（死ぬ，崩れる）訳者註）」（箴言29：18）

主イエス・キリストでさえ常に父なる神を求め導きを受けておられた。バプテスマを受けられた時と変貌の山において神は天より語られ独り子を証詞して，「これはわたしの愛する子，わたしの心にかなう者である」（マタイ3：17，17：5）と言われた。

イエスの死後新約聖書が世に出ていない間にも主は御意を人々にひき続き啓示された。主は新しく使徒に加わる人を選ぶにあたって，他の11人の使徒を導きたもうた。またダマスコの近くで，サウロに語られ，人々を慰め啓示を伝える者として，約束の聖き「みたま」を授けられた。そしてパトモス島のヨハネに多くの真理を示された。

しるしは明らかである。真の福音が地上に在った神権時代にはいつでも，神がその予言者たちを通して御業を示し導きを与えられている。

モルモン経の予言者モロナイは言った。

「神から授かる啓示を否定し，啓示はもはや廃止されて今は啓示も予言も……ないと言う人々よ。よく言っておく。これらのことを否定する人々は，キリストの福音を知らず，聖文を読んだこともない……。神は昨日も今日も，いつまでも同じにましまして変ることなく，また変ろうとする様子も見

えないことは聖文に言ってあるではないか。」（モルモン書9：7—9）

予言者ニーファイも記している。

「『われはすでに神の言葉を受け，もうこれで充分であるからこの上神の言葉は必要でない』と言う者は禍である。ごらん，主なる神は仰せになる『われは言葉に言葉を加え，誡命に誡命を加えて，これを世の人に伝え，ここにも少しく教え，かしこにも少しく教えん。故にわが誡命を守りわが勧めに耳を傾くる者は知恵を得るによりて幸福なり。われは受ける者に一そう多く与うれども，われら充分なりと言う者よりはその持てるものさえも取り上ぐべし』と。」（Ⅱニーファイ28：29，30）

イエスは御自分の教会を啓示という岩の上に建てるとペテロに言われた。（マタイ16：17）

末日聖徒イエス・キリスト教会は啓示によって建てられた。熱心な祈りに答えて，神はご自身と御子とを少年ジョセフ・スミスに現わされたのである。この奇しき出来事の後，ジョセフ・スミスは霊感のみでなく天の御使いの訪れも受けて，絶えず教えと指示を与えられた。ジョセフ・スミスを通して，輝かしい福音の真理が完全に，ありのままに回復されたのである。

では完全な福音がジョセフ・スミスに回復された後にも啓示は必要であろうか。

荒れすさんで混乱した今の時代ほどに神からの導きと助け

主はダマスコの近くでサウロに言われた。……ダマスコの近くにきたとき，突然，天から光がさして，彼をめぐり照した。……その時「サウロ，サウロ，なぜ私を迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。

を必要とする時代はおそらくないであろう。世界情勢は緊迫し，家族のきずなは弱まり，人間が崩壊に近づいていくことが日毎に明らかにされてゆく。今の世の人々にとって最も重大なメッセージは神が再び人に語られたということに他ならない。

歴史にあらわれたどの時代にも増して危機にひんしているこの時代に義と愛の神は，その子供たちを見捨てたもうであろうか。

末日聖徒イエス・キリスト教会は世のすべての人々に，啓示はやまず天は閉じられていないこと，主が今の世にご自身をあらわされ真の教会を地上に回復されたこと，そして主がまさに生きている予言者によって道を示しておられることを証詞するものである。

これらを証明することがらを簡単にあげてみよう。

予言者ジョセフ・スミスを敵視した人々は彼が死ねば教会も滅びると思い，そのためにジョセフ・スミスは憎しみに燃えた暴徒たちによって殺された。教会員たちは家を追われてしまった。多くの者が，教会員は荒野で死ぬだろうと思ったが，ジョセフ・スミスに続く主の備えられた予言者ブリガム・ヤングの霊感された導きにより，人々は幌馬車や手押車で2,080kmにも及ぶ未知の荒野や大草原を越えて，ロッキー山脈の谷間に安住の地を見い出したのである。

聖徒たちは誰も行きたくないと思うような荒野へ向った。ブリガム・ヤングはグレートソルト・レークの谷を示現に見たと言い，ゴールドラッシュにわくカリフォルニヤへ行こうと願う人々をも断固としてしりぞけ，その地へと向って旅をし続けた。

ロッキーの谷に着いて，その土地が耕作には固く種をまくには乾燥しすぎているのを知った時開拓者たちは山から流れる水をひきアメリカの近代灌漑方式をはじめておこなった。

彼らの最初の実りをイナゴの大群がおそった時，カモメがきてイナゴを皆殺しにしてしまった。古代イスラエル時代の奇跡にも比べられる出来事である。荒れたソルト・レークの谷で，開拓者たちはインディアンの襲撃や飢え干ばつや病いなどあらゆる困難におびやかされながらも，それらに打ち勝つことができた。神の導きをうけた指導者のもとに，荒れ果

神殿で天使がザカリアにあらわれる

てた荒野に豊かな王国を築いたのである。ブリガム・ヤングは，「私が人々をここへ導いたと思ってもらいたくない。全能の神の備えたもうたことなのだ。」（「講話集」4巻41ページ）と言った。

農業から工業へと時代が変わり，多くの失業者があふれた時代に，教会の指導者たちは霊感を受けて助けを必要とする教会員を手伝い，世の悪から守るために，大規模な福祉計画を打ち立てた。また主から教育の必要なことを知らされて学校や大学，後には宗教に関してセミナリーやインスティチュートを建設した。ユタ州は教育予算が全米32番目の額であるにもかかわらず教育を受ける人の割合が一番高い。

今日，タバコの害は科学によってもはっきりと証明されているが，教会では今から130年以上も前に，タバコが人のためによくないという神の啓示を受けたのである。

今日私たちは共産主義に伴う悪を憂えている。教会が回復された時から，指導者たちはなんであっても神の与えたもうた自由を奪おうとするものに対して立ち，自由を固く守るようにと教えている。

近年レジャーがふえ若い人々にとって誘惑が多くなってくるにつれて，教会の指導者たちは霊感をうけて，若人のために活動計画をもうけたが，その計画をよく知っているあらゆる人々は驚きの目をみはっている。

時代と共に家族の一致と尊厳が弱まってくるにつれて，指導者は教会全体に毎週家庭の夕べを行うことを教えた。デビッド O. マッケイ大管長はこの重要なことを強調して，次のように言われた。「家庭における失敗は他のいかなる成功をもってもつぐなえない。」（イムプルーヴメント・エラ1964年6月号67巻445頁）

世の多くの人々が末日聖徒イエス・キリスト教会の活気に満ちた力に驚きの目をみはっている。最近ある人はそれを，「キリストの教えを変えないで，それを現代の情況にあわせる不思議な能力」だと語った。

それが神よりの啓示なのである。教会を導いてゆくために教会の予言者に示される啓示，個々の生活を導くため，教会員一人一人に与えられる啓示，この啓示こそ神の真の教会のしるしである。

古　代　の　神　殿

シドニー B. スペリー博士　　B. Y. U. 旧約聖書文学及び語学教授

シック博士による「モーセの幕屋」の復元図

古くは，ノアの洪水以前の族長時代においてさえ，神殿が建てられ使用されていたにちがいないということを知ろうとして，人は聖典だけを，特に近代の聖典を注意深く調べている。教義と聖約124章39節で主は聖い主の神殿について言われた。

「……わが聖き名のために建てよとわが民の常に命ぜらるる……」

古代族長時代にも，今の時代と同様に生者に神聖なエンダウメントを与える必要がなかったとどうして言えよう。主が古代において人々の昇栄のために要求されたことが，現代においても本質的に同じことは確かである。

神と共に歩みそのふところにとりあげられたエノクとその民（モーセ7：69）を思う時，彼らが，通常聖い神殿のみで与えられたエンダウメントを受けずに主に受けいれられるようなことは考えられない。信仰のゆえに神にうけいれられたアブラハムへの祝福については教義と聖約132章29～37節で多くのことが言われている。主は彼が「最高の栄に進むを得てその王座に坐せり」と言われた。（29節）アブラハム，イサク，ヤコブは，現世にあって信仰深い人々に与えられる聖なるエンダウメントのすべてを含む福音の祝福をその人々に結び固めていたにちがいない。

シック博士による「モーセの幕屋」の内部復元図

その人々がエンダウメントを受けた神殿はどこにあったかとたずねる人があるだろう。聖典は古代族長時代の神殿について直接にはほとんど述べていないが，それだからと言って神殿がなかったということではない。実際アブラハムの時代に教会は存在しており，かの偉大なメルケゼデクがその頭となったようである。信仰の父アブラハムの什分の一はメルケゼデクに納められたのである。（創世記14：20）アブラハムは神権をメルケゼデクから受けたのである。（教義と聖約84：14）アブラハムの時代にも什分の一を納めていたという事実から，我々は，その収入の一部が礼拝の家を建てたり最初に述べたようにわが聖き名のために建てよとわが民の常に命ぜらるる」神殿を建設したり，維持したりするために使われたということを信じることができる。

注意深い読者はアブラハムの書の写しの第二にあらわされている形の説明から，アブラハムが神聖なエンダウメントの儀式やそれらの行われる神殿とかそれに似たものをよく知っていたことに気づくに違いない。さらにヨシュアに導かれたイスラエル人が現れる前にエルサレムで広く福音が説かれていたという事実は，昔神聖な土地に完全な教会が組織されていたことの可能性を我々に感じさせるにちがいない。（Ⅰニーフアイ17：35）そのような教会が神殿の霊的な恩恵を受けていたことは明らかである。

モーセがエジプトからイスラエルを導き出した時初めてしたことの一つは人々に大神権を受けさせ「神の能力顕るる」（教義と聖約84：19～20）儀式を受けさせようとしたことであった。

「而して，この神権を以てする礼式と神権の権能なくしては肉身を持てる人間に神の能力顕るることなし。」

「そはこれなくしては，何人も神の御顔，すなわち御父の御顔を見て生き得る者なければなり。」

「さてモーセは，荒野においてイスラエルの子たちにこの事を明らかに教え，その民神の面を見ることを得んために孜々として彼らを聖くせんことを努めたり。」（教義と聖約84：21～23）

モーセの持っていた計画は聖なるエンダウメントを必要とした。モーセは荒野に神殿を立てることができなかったが，儀式を施こすことのできる幕屋を作り，主がそれを嘉納した

もうた。

「また，われ誠に汝らに告ぐ，わが名に由りて建つべき宮居に於てこれを行うにあらずば，汝らの聖なる洗い如何でわれに受け入れられんや。」

「この故を以て，われモーセに荒野に在りて共に運び歩くよう幕屋を造り，また創世の前より隠されたりしこれらの儀式を顕さんため約束の地に於て一つの宮居を建つべし，と命じたり。」（教義と聖約124：37〜38）

ソロモンの神殿に至るまで荒野やパレスチナにおいて幕屋の中でメルケゼデク神権による儀式がどの程度迄行われていたかはわからないが，それらの儀式が行われていたことは次の聖句によって明らかである。

「ダビデの妻と側女たちは，わが僕ナタンとこの権能の鍵を有ちし他の予言者たちの手により……」（教義と聖約 132：39）

ナタンと他の予言者たちが妻や側女たちを，他ならぬ幕屋の神聖な場所で，ダビデに結び固めたと信じるのはもっともなことである。

士師記の17章から21章までの歴史を見るとわかるように，士師の時代にはメルケゼデク神権に関わる儀式が幕屋において行われなかった長い時代があった。その時代には「人々はおのおの自分たちの目に正しいと思うことを行った。」のである。（士師記17：6，21：25）。アロン神権に関わる儀式がこの時代にも，メルケゼデク神権より長く続いたかどうかについて，我々はほとんど知らされていない。

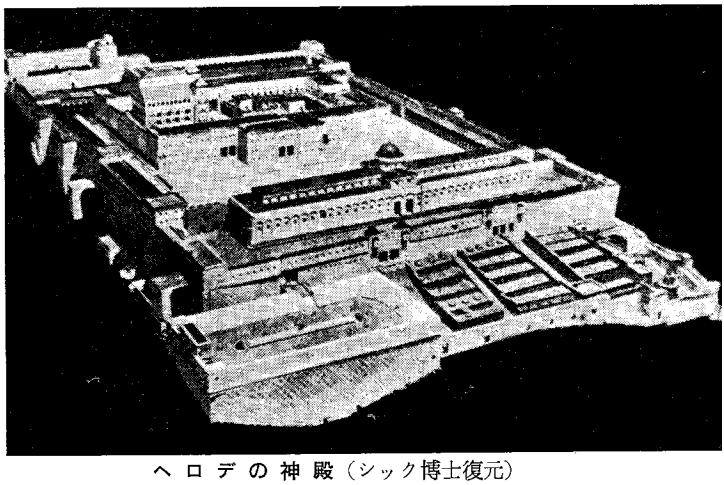
出エジプト記の25章から40章にかけて幕屋の建設やそれに関して多くの制限が与えられたということが書かれている。まず最初に主は人々に言われた。

「また，彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである。」（出エジプト記25：8）それによってその建物が普通には「主の家」として知られるようになった。（出エジプト記34：26，ヨシュア記6：24）幕屋は人々の持っている最も秀れた技術と荒野にあって得られる最も美しいものを材料として建てられた。羊の毛や皮，荒野に立つアカシアの木，紅海から運ばれたじゅごんやいるかや似たような動物の皮などがあった。テントのような形をした移動できる聖所へ入ろうと，人々は自分たちの装身具や金銀，青銅，リンネルなどを惜し気もなく豊富にたずさえてきた。

正しい幕屋は長方形で長さ30キュビト幅10キュビトで入口は東のはしに設けられていた。その高さは10キュビトあった現在の単位に直すと縦横高さがそれぞれ，13.7，4.6，4.6メートルである。建物の内部は大きく二つに別れていた。一つは至聖所として知られている4.6メートル四方の場所でありそれは真西に位置していた。もう一つは東に位置して，聖所と呼ばれそこには入口がつけられた。

幕屋は幅約30メートル，長さ約46メートルの外庭の西のはずれにおかれた。

白いリンネルのカーテンを外庭にたらして鉤や桁は銀で青銅の座を持った60の柱でとめられた。幕屋の正面にあたる外庭の東側半分には足や手を洗うための洗盤がおかれ，火祭のための祭壇がアカシア材で作られ，青銅で張られた。祭壇はイスラエル人が旅している間移動が簡単なようにへこんだ穴で，それをすえて土を満たし，その中でいけにえを焼いた。（シック博士による復元された幕屋と庭の図を参照の事）



ヘロデの神殿（シック博士復元）

以上に述べたように幕屋の中で行われるために，エンダウメントの儀式がどのように変えられたかを我々は推測するしかないが，主は契約の箱をおさめた至聖所の中で，その民の指導者と会うという約束をされた。主はモーセに言われた。

「そのところでわたしはあなたに会い，贖罪所の上から，あかしの箱の上にある二つのケルビムの間から，イスラエルの人々のために，わたしが命じようとするもろもろの事を，あなたに語るであろう。」（出エジプト記25：22）

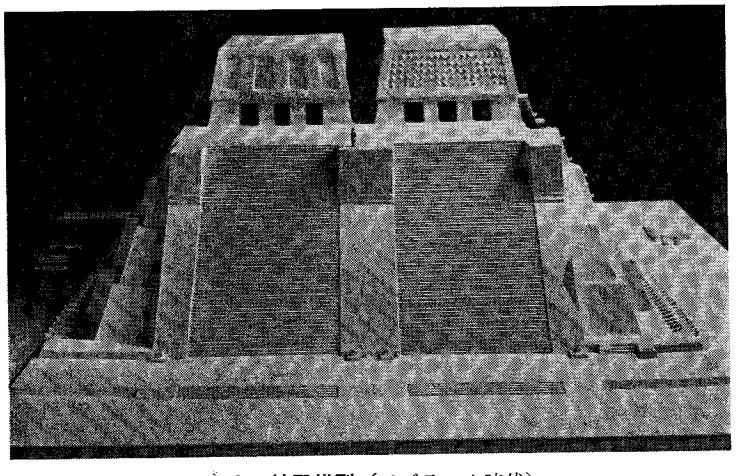
我々は幕屋の献納が，イスラエルがエジプトから脱出を始めた二年後の最初の日に行われたことを知っている。（同上40：17）

荒野を旅していた間，昼は雲が聖なる幕屋をおおい夜は火の柱があった。彼らが荒野を移動する時はいつでもレビ人が幕屋をたたんで，新しい場所にまた組み立てたのであった。

（同上40：34〜38）

イスラエル人がカナンに定着した時，ヨシュアは幕屋をシロに置いて，その状態は士師時代を通じて続いた。（ヨシュア記18：1）サウルの治めた時代に幕屋はノブにあった。（サムエル上 21：1，マルコ 2：26）ダビデの統治時代ほとんどとソロモンの神殿を建てた時代までは幕屋がギベオンの高き所にあった。（歴代志上16：39，21：29）そしてついにソロモンはそれを神殿の中にすえた。（列王記上 8：4，歴代志下 5：5）その神殿は同じ形に建てられたが全体が少くとも二倍の大きさはあった。

ソロモンの神殿として知られている永遠なる主の家の材料はほとんどダビデによって準備された。（サムエル下 7：1，歴代志上 28：11，29：9）ダビデは神殿とその付属物のために合計で金 108,000 タラント 10,000 ダリクと銀 1,017,000 タラントを集めた。これらの金属その他をソロモンが配置して，最も豪華な神殿が主に捧げられたのである。ソロモンの神殿は7年半かかって完成した。



テナユカの神殿模型（アズテック時代）

ソロモンの神殿やそれ以後に続いて建てられたイスラエルの神殿の中で行われた儀式について，我々が述べる必要はほとんどない。それらの儀式は幕屋で行われたのと全く同じであったに違いない。

現在ある人々が12頭の牛に支えられた「鋳てつくられた海」または盤がソロモンの神殿の地下にあって，死者のためのバプテスマを象徴していたと誤解していることについて一言いわなければならない。歴代志下でそのことについても言われている。

「……海は祭司がその中で身を洗うためであった。……彼（ソロモン）は海を宮の東南のすみにすえた。」（歴代志下4：6，10　列王記上7：39参照）

アハズの時代（BC736〜721）に王は「海」を青銅の牛の背からおろして石の座の上にすえた。（列王記下16：17）BC 590（モルモン経年表）にネブカデネザルがエルサレムをとりこにした時，彼はその盤を粉々に砕いた。（列王記下25：13，エレミヤ27：19〜22）

数々の「海」がバビロニア神殿につくられたということを学者たちが断言しているのは我々にとって興味深いことである。〔国際評論 "Kings"（王）モントゴメリー173頁〕

バビロニア捕囚に引き続いてペルシャ王クロスはBC 500年にネブカデネザルによって破壊された神殿の代りに高さと幅が60キュビト（27.5メートル）の神殿をつくるようユダヤ人に命じた。（エズラ6：3，「古代の遺物」ジョセフアス XI. 4，6，XV. 11，1）神殿建設はおそらく彼らがとらわれの身を脱してから二年ほど後に始まった（BC537?）が，ユダヤ人はサマリア人の攻撃を何度も受け，いろいろな困難にあって建築を続けられなくなった。ダリウス王の治世二年め（BC520）に主はユダヤ人に聖なる神殿の建設をやめるようにと言われた。ハガイの予言は全てこのことに関するものである。大体においてソロモン神殿の計画に準じて行われたが民の窮乏のために前のように大規模ではなかった。以前の神殿で使われていた器の多くはまた回復された。（エズラ1：7〜11）ネブカデネザルの軍がパレスチナへ攻め入った時に契約の箱がなくなっていたので至聖所には何もなかった。

ゼルバベルの名にちなんでゼルバベル神殿と呼ばれ，また時には第二神殿と呼ばれた神殿はダリウス王の7年目BC 515 に完成した。（エズラ 3：8，6：15）

第二神殿の献堂からそう年数がたたないうちにユダヤ人は世俗の欲にふけり，神殿内の聖い儀式を執行するのにふさわしくなくなった。マラキ書（1：2，2：17，3：5〜18）は，堕落した民に対する偉大な予言者の抗議である。我々は神殿が献堂されてからその中で執行されていた儀式がいつまで主の認めておられたものであったかはわからないが，そう長い間ではなかったに違いない。イスラエルから予言者がいなくなってから400年間ほどの時代の神殿の管理についてくわしいことを知るのは興味がある。

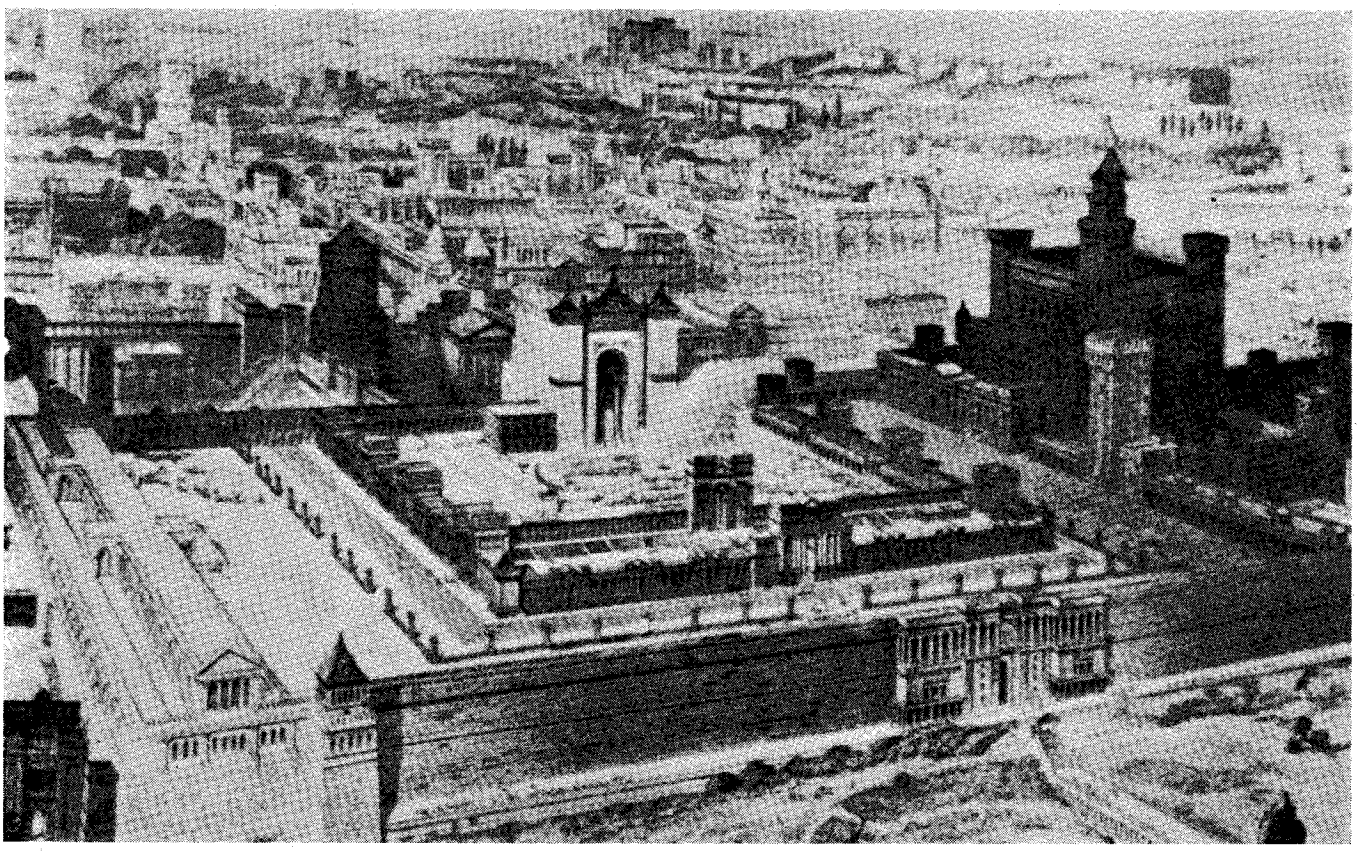
ユダヤ人のある者はナイル川のほとりの後にエレフアンタインと呼ばれたイエブ島に神殿を立てた。このユダヤ人たちはもともと傭われた人々でアラム語を話したり書いたりした。彼らが自らを治めて，自分たちのしきたりを持っていたことを示すパピルスの文書がその島で発見された。

散乱した他のユダヤ人の習慣や律法とは明らかに異って，彼らはヤフをまつる神殿を持っていた。その神殿で彼らは食物や香やいけにえを捧げた。パピルス文書によって彼らが種入れぬパンや過ぎ越しの祭りも行っていたことがわかる。ペルシアの王カンビセスがBC 525年にエジプトを征服した時彼はエジプトの神殿を破壊したがヤフの神殿は残した。だいぶ下ってBC 411年ペルシャの総督がエジプトを離れていた時，羊頭のチナム神に仕える祭司にそそのかされて怒ったエジプト人はユダヤの神殿を破壊した。ユダヤ人はただちにユダヤの総督バゴアスや大祭司ヨハナンや他のユダヤ人に救援を頼んだことがパピルス文書に示されている。その返事は来なかった。BC 408年に植民地のユダヤ人は再びユダヤに住む人々に贈り物をし手紙を送って懇願した。その時には神殿を復興し食物を供えたり香をたくことが認められた。最近にいたるまで神殿が実際に再建されたことは疑わしいとされていた。今日，エミル　G.クレリンによる「ブルックリン・アラム古文書」ではそれが実際に建てられたと言われている。」(「聖書考古学」15巻3章66頁)

彼らがヤフを拝んでいただけでなく，アシムベテル，アナスベテル，シェレムなどカナンの神々をも拝んでいたと知った時に，イエブで神殿を建てていた人々の霊的状態がどのようであったかよく理解できるに違いない。エレファンタインにおいてアナスはアナスヤフという名のもとにヤフ神の花嫁として君臨していた。イエブに手紙を書いたユダヤに住むユダヤ人の霊的状態もこれらの事実から想像するに難くはない。

ゼルバベル神殿はついにヘロデ神殿にとってかわった。聖所についてのかなり完全な記述はユダヤ歴史家ジョセファスやミシュナによって書かれている。古い神殿は新しい神殿の建築材料が多く集められるまで取りこわされなかった。

新しい神殿建設の事業はヘロデの統治18年目，BC20～19年に始まった。ヘロデ神殿と合体した大きな庭や建物はAD 63～64年の行政長官アルビナスの時に完成された。神殿の部分は前の二倍に広げられ，神殿そのものは白い大きなブロックで建てられ，内部はソロモン神殿と同じ長さと幅だが高さはソロモン神殿が30キュビト（13.7メートル）だったのにひきかえ，上部の部屋を数えないで40キュビト(18.3メートル)だった。ヘロデ神殿は初期の神殿と同様，至聖所と聖所にわかれていたが装飾はずっと華やかだった。至聖所は空っぽで聖所とは幕で区切られていた。この神殿についてのくわしい説明はジョセファスの文献によく記されている。



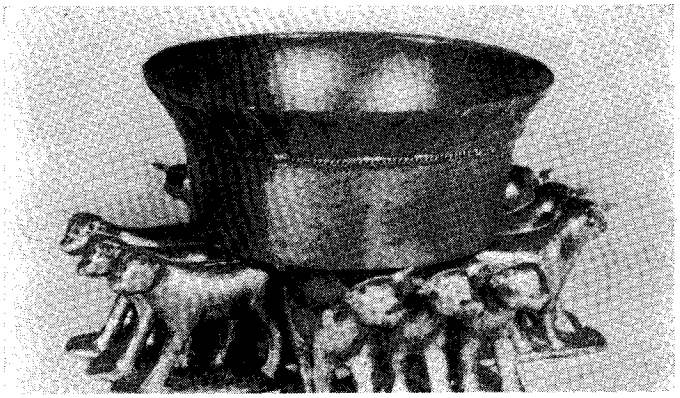
ソロモンの神殿

モルモン経はヘブライ民族の他の枝であるニーファイ人が神殿を使うことを知っていて，アメリカ大陸において多くの神殿を建てたことを教えている。最初の神殿がニーファイとその民が義しくない兄弟たちと別れた後，ニーファイによって建てられたことは明らかである。その神殿は真ちゅう板に刻まれているソロモンの神殿に似せて作られた。

ニーファイはこう述べている。

「私ニーファイはまたソロモンの神殿にならって一つの神殿を建てたが，そのちがっている所はさほど多く貴重な品を使って建てなかっただけである。それはかように貴重な品が当時この地になかったから，それでソロモンの神殿とちがわない様に建てることができなかったのである。しかし，その建築の様式はソロモンの神殿と同じであって，その製作の技倆は非常に見事であった。」（Ⅱニーファイ 5：16）

主からの啓示なしにニーファイが神殿を建てたはずはない。また神殿に伴なう儀式はみな啓示されたに違いない。ニーファイ人はモーセの律法を守っていたが，アロン神権の制限に従って生きるための儀式だけが聖なる神殿の中で行われたとは思われない。ニーファイと彼に従う人々は福音の律法に忠実であったからメルケゼデク神権による生者のための儀式すべてが行われたことはもっともである。ニーファイは別のニーファイがヒラマン書で述べているように，神権の結び固めの能力を持っていた。（Ⅱニーファイ33：15，ヒラマン10：7）これらの予言者がいる間完全なエンダウメントが正しく行なわれていたか，もしくはアロン神権内の制限されたエンダウメントが執行されていたかもしれない。



ソロモン神殿の「鋳てつくられた海」

おそらくニーファイの兄弟であるヤコブはこの神殿で教えたであろうが，ベンジャミン王はゼラヘムラの地にあった別の神殿で教えを説いた。（モーサヤ 1：1，18）

ゼニフの民はその先祖の地へ再びもどってきた時に古い神殿を修復したか，あるいは新しい神殿を建てたに違いない。（モーサヤ 7：17）ゼニフの民に関して，神殿の使い方についてのおもしろい質問が出てくる。彼らは神殿内の儀式を執り行う権能を持っていたのだろうか。または彼らはただ神殿を集会の場として使っていたのだろうか。正しい権能を持っていたかどうかという疑問は特に悪王ノアの時代について起ってくる。

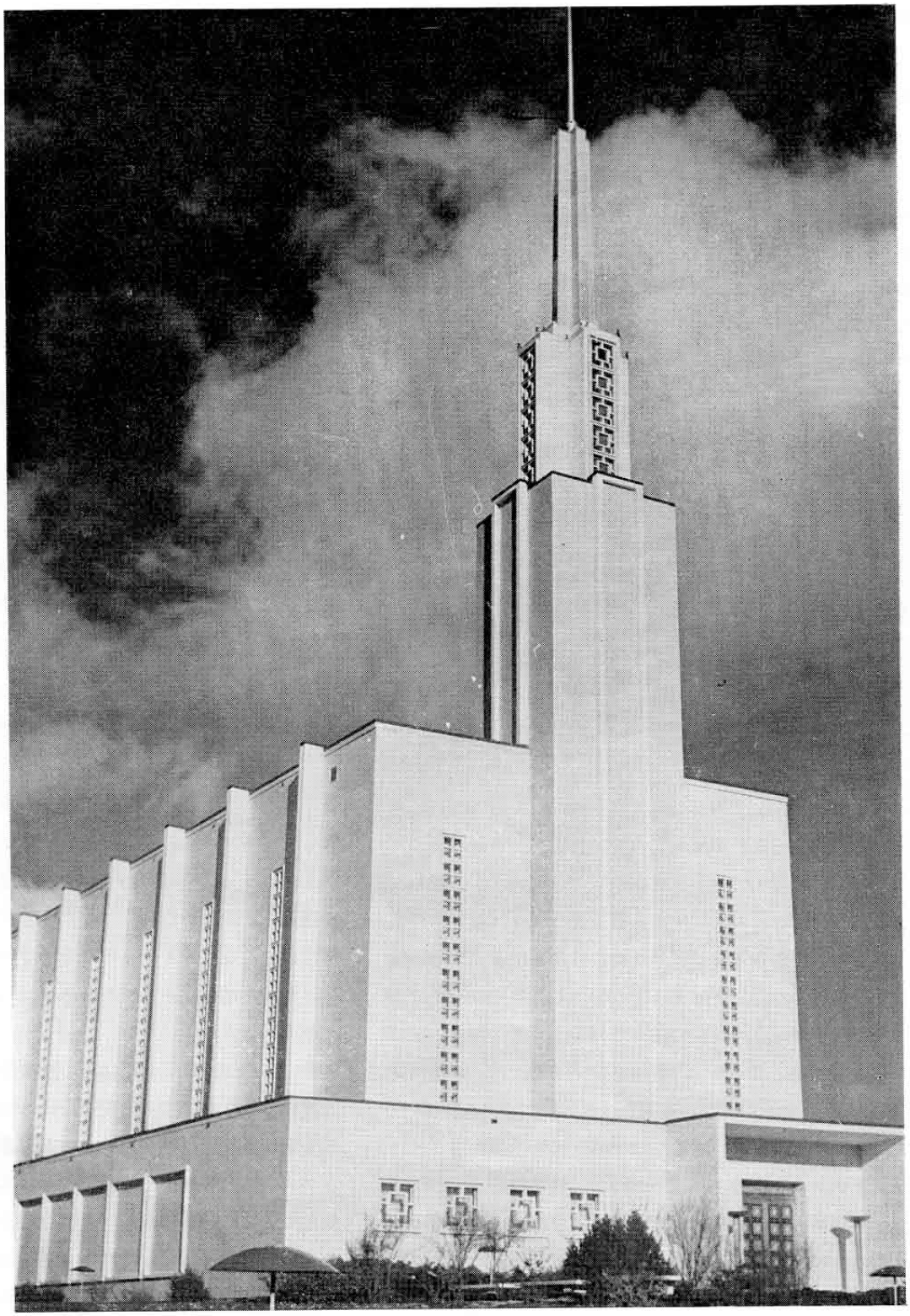
ニーファイ人の神殿がいつどこに建てられたかは教えられていないが，その神殿でおきた出来事がアミュレクによって書かれている。

「私はアミュレクと言ってギドーナの子である。ギドーナはまたアミナダイの裔のイシメルの子である。このアミナダイは，神がその指で神殿の壁に書きたもうた文字を解いたアミナダイであって，エルサレムの地から出てきたリーハイの子であるニーファイの裔である。……」（アルマ10：2～3）

復活し栄光を持ちたもう主が三日間続けてニーファイの民に現われた時，「バウンテフルの地にある神殿のまわりでは……」（Ⅲニーファイ11：1）と言われている。我々の主の復活の前には，死者のためのバプテスマがパレスチナの神殿でもアメリカ大陸の神殿でも行われていなかった。しかし復活後キリストは，その仕事をニーファイの民に完全に説かれた。それはマラキ書の3章，4章を引用されたことによってわかる。「……事の大小の区別なくあらゆる事をかれらに説きたもうた。」（Ⅲニーファイ34，25，26：1）こうして死者のための儀式に関わるエライジャの結び固めの能力がニーファイの民に知らされた。この働きが彼らの義なる時代，すなわち四代めにいたるまで神殿の中で執行されていたと考えられる。エライジャについてマラキを通して語られた救い主の御言葉をモルモンが説くことは許されなかった。我々の神権時代におけるエライジャの使命についての知識の鍵はジョセフ・スミスに与えられ，彼がその正しい働きを人々に知らせたのである。

救い主の復活に引き続いて，死者のための儀式が地中海地方に建てられた聖なる神殿で行われた。コリント人への第一の手紙15章29節にパウロによって記されている死者のためのバプテスマがそれを示している。とにかくコリント人はこの働きにふさわしい神殿に出入りしていたのである。それはおそらく小さな神殿だっただろうが，はっきりしていない。紀元1世紀の初期に聖徒たちが主に対して同様の建物を建てたことも真実である。

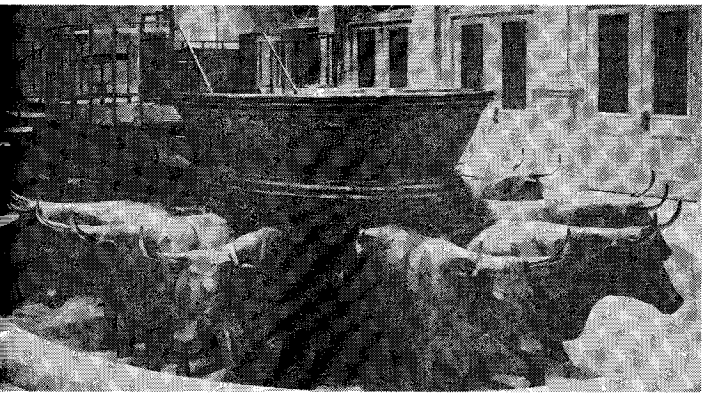
末日聖徒の結婚



スイス神殿

一副管長　ヒュー　B. ブラウン

神殿の「バプテスマ・フォント」は12頭の牛の彫像の上に置かれている（ソルト・レーク神殿）



結婚は本来神聖なものであり，神聖に行うべき儀式である。神聖（サクラメント）ということばはいろいろな意味で用いられるが，それはキリスト教徒の間では正しい権能を持つ者によって執行される宗教的行為や儀式を意味している。それは誓約，聖なる契約，霊的な象徴であり，人間どうしのあるいは人間と神との間の契約のきずなである。その結婚が主によって定められ聖められたことは次の言葉により明らかである。

「また主なる神は言われた，人がひとりでいるのは良くない。彼のために，ふさわしい助け手を造ろう。」

「それで人はその父と母を離れて，妻と結び合い一体となるのである。」（創２：18，24）

イエスがガリラヤを去ってヨルダンを越えユダヤの岸辺に行かれた時，多くの群衆がイエスについて行き，その中のパリサイ人が離婚についてたずねた。

イエスは答えて言われた。「あなたがたはまだ読んだことがないのか。『創造者は初めから人を男と女とに造られ』そして言われた。それゆえに，人は父母を離れ，その妻と結ばれ，ふたりの者は一体となるべきである』。彼らはもはや，ふたりではなく一体である。だから，神が合わせられたものを，人は離してはならない。」（マタイ19：４～６）

神が男と女とを一つにあわせようとされたことは，明らかである。神が御自らこの結婚を執行され結婚を聖められた。結婚は自然であり健全で望ましい状態であり，この地上における神の目的を成就するために定められたものである。

＊ ヒュー B. ブラウン著　You and Your Marriage（結婚とあなた）の序文より

それは国家の中心となる要素である。結婚は単に人の法律や慣習により生み出された制度ではなく，また道徳律で認められた単なる契約でもないのである。結婚は，霊の子供たちが死すべきこの世の生をうけ，不死不滅と永遠の生命をもたらされるという神の定めたもうた目的において，男性と女性が神と協力して聖い責任をひきうけるという本来宗教的儀式なのであり，また確かにそのようにすべきものなのである。

至高至純で最も望ましい生命は結婚聖約をしないで得られると言う人々がある。そのような人々は，至高の栄光を求める人々に「物質的，肉体的結びつきによって影響される」ことをやめさせようとするのであろう。しかし聖典にはそのような教義の根拠は何一つない。箴言の中に次のように書いてある。

「妻を得る者は，良き物を得る，かつ主から恵みを与えられる。」（箴言18：22）

またパウロはテモテ人に書いている。

「しかし，御霊は明らかに告げて言う。後の時になると，ある人々は，惑わす霊と悪霊の教えとに気をとられて，信仰から離れ去るであろう。」

「それは，良心に焼き印をおされている偽り者の偽善のしわざである。」

「これらの偽り者どもは，結婚を禁じたり，食物(肉)を断つことを命じたりする。しかし食物(肉)は，信仰があり真理を認める者が，感謝して受けるようにと，神の造られたものである。」（テモテ４：１～３）

また教義と聖約には次のように記されている。

「また，われ誠に汝らに告ぐ，何人にても結婚を禁ずる者は神より聖職の按手任命を受けたる者にあらず，それは結婚は神の人に定めたるところなればなり。」（教義と聖約49：15）

末日聖徒は，現世と来世とにおいて最上の生命と至上の幸福を得るために，人は神殿において今も永世にも結ばれなくてはならないと信じている。神殿結婚の結び固めの儀式なしで，人は神のようになることはできない。また完きよろこびを受けることもできない。なぜなら結婚をしない人は一人前の人間ではなく，完成されていないからである。

末日聖徒にとっては，教会の神殿で執り行われる神殿結婚がただ一つの望ましい結婚である。神殿は霊的かつ永遠の儀式が行われる聖い場所を備えるために建てられ主に捧げられる。他の教会の聖職者や役人やその他法的に認められた人により行われる市民結婚も認めるが，私たちは神殿においてのみ今も永世にもわたる結婚ができると信じ，それは，キリストが，「……あなたが地上でつなぐことは，天でもつながれ……」（マタイ16：19）と云われた時に，ペテロに授けられたと同じ権能を持つ者によってのみ行われると信じている。

この権能は聖典の中で『天の王国の鍵』と言われている。日の光栄の結婚においては，その鍵が天の王国の扉を開くのである。

人間は，道徳的，社会的，生物学的，霊的かつ基本的な欲求を持っており，神の定められた永遠の結婚によってのみ，これらを完全にみたすことができるのである。

この世と永遠にわたって豊かに生きるため，人は愛し愛されなくてはならない。奉仕をし犠牲を捧げ責任を受けて，神から与えられた創造の力を十分に働かせなければならない。

「……わたしが来たのは，羊に命を得させ，豊かに得させるためである。」（ヨハネ10：10）

しかし，夫と妻が恵みを受けることに結婚の最も大きな価値があるわけではない。はじめに，結婚の目的は「生めよ，ふえよ，地に満ちよ，地を従わせよ……」（創世記１：28）と言う主の命令により明らかにされた。

正しい結婚には男性にとってその自然の衝動が創造的，生産的であると知る機会がある。その機会は結婚し子供を持ち育てることによってのみ完全に成就することができ，よろこびがもたらされるのである。両親は自分たちに生れた子供が神の子供でもあることを心にとめなくてはならない。神が彼らの霊の父であり，前世に在った時，神は永遠の元素と霊が分かつ能わざるように結合し，完きよろこびを受けるように計画なされたのである。それゆえ末日聖徒は，神が実際に結婚における第３のパートナーであることを信じ，神聖な結婚において子供たちに地上の生命を得させることが人に不死不滅と永遠の生命をもたらす神の御計画の一部であることを信じている。

主イエスは，神と隣り人を愛することを二つの大きないましめとして示され，愛が最も大切なものであると教えられた。事実神は愛であると教えられている。だから神が永遠であるように愛も永遠であるに違いない。愛の結実と祝福は来たるべき永遠を通して続くように計画されている。しかしもし愛に「死があなたがたを分かつまで」という制限があるなら，夫と妻，両親と子供たちを結びつける永遠の愛を享受するために，この最も美わしいつながりを認め，聖別する儀式は行われないのである。

永遠であるべき家族関係や夫婦関係にとって結婚契約は「今も永世にも」わたって権威あるものでなくてはならない

すべての人々は子孫に対する責任とそれに加えて，聖約に対する責任を悟らなければならない。主が，「死者なくばわれら完うせらるるを得ず」と言われた時，キリストは過去同様未来にもつながるきずなにふれられたのである。まことに私たちは祖先に対してよりももっと身近に，この世において託された子供たちに責任を持っていると言えるであろう。

死者が御言葉を受けいれようと拒もうと私たちにその罪は帰せられることはないが，もし私たちが子孫に対する義務を怠ったことによって，彼らが主から遠ざかるとすれば，罪は私たちの頭にとどまるのである。聖なる王国において最高の位をうける人々に与えられる祝福の中に，永遠にわたって子孫を増やすことができるという祝福がある。それは，死の後にも人々が人に不死不滅と永遠の生命をもたらす働きを神と協同して続けてゆくことを意味している。

末日聖徒のもつ永遠進歩の概念には永遠の成長や知識，能力，英知，認識，その他神のようになるため必要なあらゆる特性と能力の永遠にわたる増進が含まれている。しかし神のご計画において，人は結婚をせず不完全にとどまっていては，完きに向って進歩し続ける状態になることができないのであり，すべての人，すなわち，自分の伴侶をさがしてそれと一体となったすべての人は成長し，徳を増し加えるのである。神の御意にかなう結婚の概念は，結婚に新しい意味を与え，重要性と神聖さと栄光とを加えるものである。このように考える人々は永遠の伴侶をより慎重に選択するはずである。かならず二人の男女はこの永遠の契約を結ぶ前に，謙遜に心をこめて祈りつつ神の導きを求めなくてはならない。

二人が同じ信仰を持っていることがぜひ必要であり，結婚に先だって同じ目標を抱いて出発するところに，結婚の宗教的神聖さや神の承認の必要を認める気持と感謝が非常に大きくなるのである。資格ある者だけが入ることのできる聖い建物で神聖な儀式を受けるためには準備をし価値ある者となる必要がある。

ここにおいて，夫婦は教えをうけ，誓約をし，聖壇にぬかずいて神と御使いたちの御前で互いに永遠の愛と貞節を誓うのである。このような責任を伴うという結婚の考え方と儀式は，家庭を永続させ結婚を栄えあるものとし，人の身も霊も救うために大いなる力を与えるものである。このような結婚は本質的に，その聖なるパートナーである神の御前で厳粛に行われる信仰の行いである。そこには，人生におこる困難，辛苦，絶望，不幸などにもかかわらず，先を見通して最後まで耐え忍ぶための信仰と勇気があるに違いない。

人が永遠に連れあいとなりそれに伴う責任を受けようとする時，結婚生活における失敗はほとんどあらゆる失敗につながるということをさとらなければならない。他のどんな分野で成功していてももしその人が永遠の契約にもとずいた家庭での義務を遂行していないならば，おそろしろ報いが日の光栄にとって代わり，自分が契約し，責任を負うべき人々の支持を失ってしまうことになるであろう。

「……結婚は神の人に定めたるところなればなり。この故に，人各々一人の妻を有つことは義し。而してこの二人の者一体となるべし。すべてこれは，この世の造られたる目的に適わんためなり。」（教義と聖約49：15～17）

新しい教会幹部

4月の第138回目の教会の年次総大会に集った教会の会員たちは新しく教会幹部に召された4人の兄弟たちを心から支持した。使徒のアルヴィン・R・ダイヤー長老は大管長会副管長として，また七十人最高評議員会々員のマリオン・D・ハンクス長老は十二使徒評議員会補助として支持された。この他にヴアージニヤ州フェアーファックスのハートマン・レクター・Jr.長老と，マサチューセッツ州ナティックのローレン・チャールズ・ダン長老が新しく七十人最高評議員会々員として召された。

アルヴィンR.ダイヤー

（副管長）

アルヴィン・R・ダイヤーは神権の責任と指導者の働きに献身され，新らたに大管長会に召された。彼は1903年1月1日にソルトレーク市に生まれ，12人の兄弟姉妹と共にすばらしい末日聖徒の家庭の中で成長した。彼は思い出して語った。「私は両親を心から愛し尊敬しています。」「私の父はもう年老いて亡くなりましたが，西部開拓者の一人でした。子供の頃父は悪気のないインディアンに開拓者用の馬車を盗まれてしまい，その代りに6頭の小馬をおいて行かれたことがありました。しかし後に父は西部に住んでインディアンと親しく接し，彼らのよき相談役となりました。少年の時彼は毎晩ソルトレークの中心街に36のガスランプをつける仕事をしました。馬を愛し，16才の時ソルトレークの谷からアイダホのスネークリバーまで放牛をしたこともありました。父は18才の時，機関車の運転助手となり，20才で機関手になりました。それは後に父の生涯の仕事となりました。」

ダイヤー長老はソルトレーク市の学校に通い，スポーツで有名になった。その後，東部諸州で伝道し，そこで彼は地域主任となり，1923年にはクモラの丘の野外劇に参加した。恐らくそこで野外劇が催されたのはそれが始めてのことであろう。

1926年にメイ・エリザベス・ジャクソンとソルトレーク神殿で結婚し，二人の子供グロリア・メイ（リード・クレイン夫人）とブレント（キャロル・リン・スミスと結婚）に恵まれ，現在5人の孫がある。

ダイヤー長老は8年間板金工として働き，それから建設資材会社の冷暖房関係の仕事を担当し，1949年にはそれに関する会社を自ら設立した。

1954年セントラルステーツ伝道部を管理するよう召された時は，すでに三つのワード部の監督と，二つのステーキ部の高等評議員として奉仕していた。4年間伝道部長として働き，その後YMMIAの管理会長会第一副会長に支持された。1958年10月11日に十二使徒評議員会補助に召された。1960年から1962年まではヨーロッパ伝道部の伝道部長として働いた。親友は彼について「活気のある，よくできた，非常に霊的な神の僕である」と述べている。彼は今日まで教会の建設のために献身してきた。ダイヤー長老は福音を必要としている人々を見つけ，王国に導き入れるスピリットに満ちた実に経験豊かな宣教師であり，この聖なる召しにおいて他の人々を鼓舞する賜物と力とを持っている。

ヨーロッパ伝道部長としての彼の熱心な霊感に満ちた指導力と，疲れを知らない働きは全ヨーロッパの伝道活動を大いに盛り上がらせ，成功に導いた。宣教師に対する彼の有益な忠告，大会での数々の指導，奮い立たせるようなお話，暖かい思いやりと励まし，また各宣教師との面接などに驚くべきよい結果をもたらした。彼は「みたまによって証しする」ように，人の心を動かすというチャレンジを宣教師に与えた。

また福音を教える唯一の効果的な方法は，みたまの力による証詞の中にある「強い説得力」によるということも彼らに知らせ力づけた。

また宣教師に，みたまの導きを受けるにふさわしい生活をし，恐れず証しできるように切望した。彼の宣教師に対する合言葉は「インマヌエル——神，我らと共に在り」だった。

ダイヤー長老は1967年10月5日に使徒に按手聖任された。この新しい責任において，彼の深い霊性と強い指導力はこの完全な教会に大いなる力を投げかけるであろう。

マリオン D. ハンクス

（十二使徒評議員会補助）

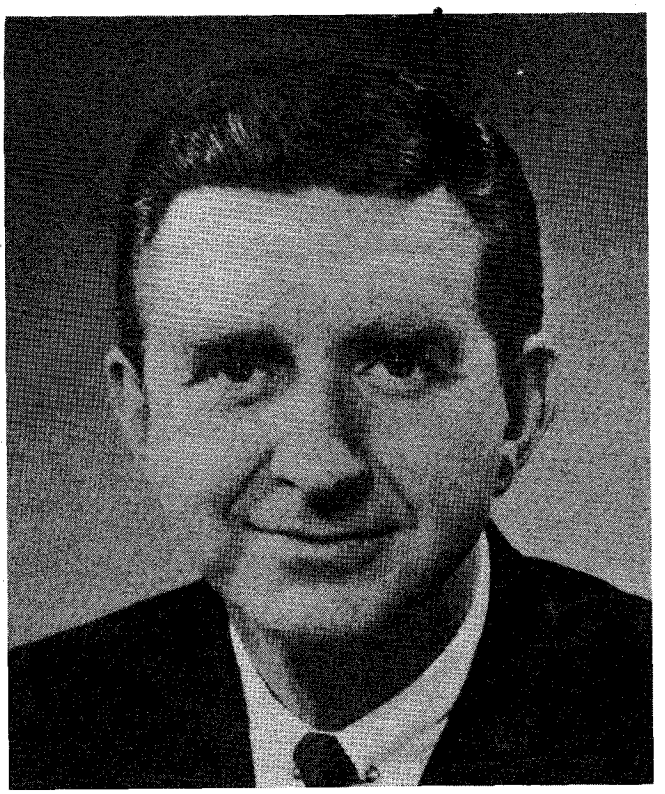
マリオン・D・ハンクス長老は15年近く七十人最高評議員会の一員であった。彼は1953年10月にその責任につくよう支持された。15年の期間中，彼は若人のよき相談役として知られ，問題を上手に解決する深い洞察力と勇気ある人物として注目されるに至った。ハンクス長老の話は国中の一般の人々の間にもよく親しまれており，今もなおインプルーヴメントエラの若人の欄の編集長として教会に著しい貢献をなしている。

1921年10月13日にソルトレーク市に生まれた。ハンクス長老が2才の時彼の父親は亡くなり，その後彼と6人の兄弟妹姉たちは母親の手一つで育てられてきた。彼の幼な友だちは母親の教えと彼自身の生き方を表わしているハンクス長老の若い時代を回想して次のように語っている。

「私は今でも彼が自分たちよりもっと困っている家族を助けるため食料品袋を肩にのせて大通りを運び歩いている姿をはっきりと思い出すことができます。」

彼は肩だけでなく，指をも強く敏活に鍛えたようである。若い頃，マーブルゲームで州のチャンピオンになったこともある。この運動のすばらしい腕前は彼の高校時代から大学時代へと続いた。事実，今日ハンクス長老は有能で数限られたハンドボールの選手として注目を浴びている。

彼の大学のバスケットボールのコーチはハンクス長老について，今までユタ大学で会った中で最も有望なバスケットボールの新人であったと述べている。しかし北部諸州伝道部の伝道を果たすために，一つの奨学金をことわった。若くして執事になった彼は教会の標準聖典やシエィクスピアものを読むために夜遅くまで起きていたことが幾度となくあった。彼



はユタ大学の法学部を卒業したが，法律の仕事に従事するかわりに，七十人最高評議員会に召されるまで，教会のセミナリーやインスティチュートで教えていた。今でもインスティチュートで教え続けているが，時々そこにはステーキ部大会と同じ位の人々が集ってくる。彼の最も大きな喜びは人々が光明と真理を求める時に，勇気と助けを与えることである。

ハンクス長老はマクスィン・クリスチャンセンと結婚し，5人の子供，スーザン・ジェイ（17才），ナンシー・マリイ（16才），アン・エリザベス（14才），メアリー・リンダ（11才），リチャード・ダフ（8才），に恵まれている。

親友が次のように語っている。

「ダフにはどことなく人を強く引きつける魅力があって，友だちに愛されている。仲間の間では『ダフ・ハンクスの話』として知られるようになった彼の善意，親切，ユーモア洞察力，鋭敏な心，立派な行いなどについての話でもちきりで，夜が更けることもしばしばあった。」

ハンクス長老は働く人々に平和をもたらすために，多くの静かな戦いを続けてきた。人や問題に関して，公正な判断をくだすために数多くの勇気ある行動をとってきた。

「彼は自分のことをかえり見ず，惜し気もなく，人に物を与え，それを忘れてしまいます。彼は，私が伝道に出る時に，自分が必要だったにもかかわらず，私に洋服を買ってくれました。私はその恩を決して忘れません。」ともう一人の

知人が述べている。彼は充分に配慮して何かをするというたぐいまれな賜を持っており，最近彼は極東—ハワイ地区の伝道の任務にあってベトナムを訪れた時に，そこで会った若い兵士の妻や両親にあてて個人的に400通以上の手紙を口述して書くことを思いついた。

ハンクス長老は連合募金運動，ボーイスカウトやP.T.A.の仕事，大統領が指示された健康適性委員会（ドワイト・アイゼンハウアー大統領のもとで青少年のために設けられているもの）など，健全な活動に積極的に参加してきた。またカーライル兵営にあるストラテジック兵学校に二度代表委員として参加したことと，そこにおける彼の祈りは，他の委員たちに忘れることのできないものとなっている。ハンクス長老は直接あるいは間接的に知りあった無数の人々から，愛と尊敬を一身に受けてきたのである。

新らたに七十人最高評議員会々員に召された二人は，非常に対照的な経歴と新しい責任を受けるにふさわしい印象的な数々の実績をもっている。改宗16年のハートマン・レクター・Jr.長老とステーキ部長の子息ローレン・C・ダン長老である。

ハートマン レクター ジュニア

（七十人最高評議員）

ハートマン・レクター・ジュニア長老は今43才で，5年間

ポトマックステーキ部で542番目の七十人定員会の会長として奉仕していた，現在合衆国農務省の財務局で企画および予算分析係として働いている。彼は1924年8月20日，ミズリー州モベリーでハートマンとヴィヴィアン・フェイ・ガーヴィン・レクターの息子として生まれ，モベリーの近くの農場で育った。その地で彼は高校と短期大学を卒業した。その後海軍飛行士としての期間を終え，1947年にモベリーのコンスタンス・カーク・ダニエルと結婚し，ミズリーで農業を営んでいたが，朝鮮動乱に召集され，1958年まで軍隊にいた。

彼に福音の紹介をした信仰深い末日聖徒の軍人マクドナルド・ジョンソン氏に出会ったのはその期間中であった。1952年3月25日に（気温は摂氏1度位であったが）ハートマン・レクター・ジュニアは東京の郊外でバプテスマを受けた。彼の改宗により，末日聖徒の軍人がいかに熱心に福音を他人に分かち，数多くの改宗者を出しているかを知ることができる。レクター姉妹もまた1952年の3月にバプテスマを受けている。レクター長老は軍隊にいる間にも，ケンタッキー，ミネソタ，ジョージア，カリフォルニア各州の大学で学んだ。朝鮮動乱後，合衆国農務省の主任検査官となつた。

教会における彼の活動は多様で非常に経験豊かである。日曜学校教師—4年間，ワード部MIA会長—2年間，ステーキ部宣教師—4年間（彼はこの期間中，47人にバプテスマを施した），ワシントンステーキ部伝道部長—1年間，ステーキ部MIA会長—3年間，現在はワード部セミナリー教師と542番目の七十人定員会々長である。

レクター姉妹は現在ポトマックステーキ部扶助協会々長会の第二副会長として奉仕している。

彼らは教会の書物を愛し，数年間家族をはなれてミレニアル書店を経営していた。その利益は教会の資金に寄付された。

彼らには七人の子供がいる。ジョエル・カーク（19才，南ブラジル伝道部で伝道中）キャサリン・ガーヴィン（17才）ローラ・コンスタンス(16才)，リンダ・マリー(14才)，ダニエル・ハートマン（11才），リラ（6才），ジョン・マーカス（2才）である。

レクター長老は自身の改宗を思い起して次のように語った。「私はどんなにか福音に興味をもったことでしょう。

ずっと真理を求め続け，そして祈りました。私は同じ祈りを何千回となく捧げてきました。『主よ，どうぞ私を真理の道へお導き下さい。真理を知らしめてください』と。これこそずっと求め続けてきたものであり，心から求めていた教会

一真理であります。ウイル・ロジャースは『私の知識のすべては新聞の中で得たものです』と言っていますが，『私のもっている知識のよいものすべては教会の会員になって学んだものであります』と私は言うことができます。」

デビッド・O・マッケイ大管長はレクター長老を七十人最高評議員会々員として召された時「主があなたを愛しておられるように，私たちもそうであるということを知っていただきたい」と述べられた。こうして，マッケイ大管長が教会の大管長となられてから11ケ月後にバプテスマを受けたレクター長老は今，すべての人類に真理を広めるべく，マッケイ大管長やその他の教会幹部と共に働いておられるのである。

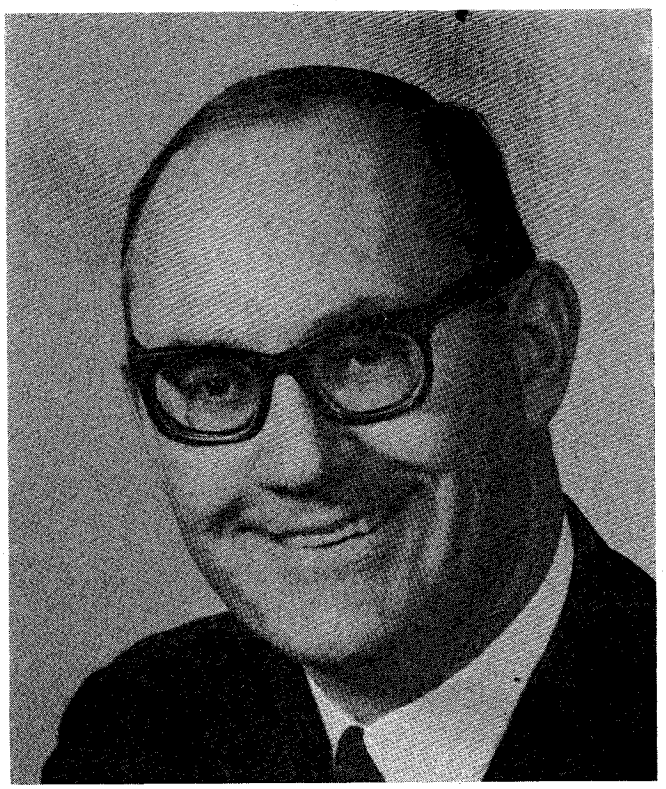
ローレン　C. ダン

（七十人最高評議員）

ローレン・C・ダン長老は4年間ニューイングランド伝道部長会の第一副伝道部長として奉仕し，現在はボストンに本部をおくニューイングランド評議会，経済開発局の通信部長である。

彼は1930年6月12日にアレックス・F・ダンとキャロル・ホースフォール・ダンの末っ子として生まれた。彼の父親は20年間トウーエルステーキ部のステーキ部長であった。またトウーエル・トランスクリプト新聞の発行者でもある。ダン長老は1949年から1953年までブリガム・ヤング大学（ジャーナリズム専攻）に籍をおいた。彼はそこでバスケットボールチームの一員として活躍し，1951年にはニューヨーク市で行われた全国招待対抗試合に優勝している。その選手団は南アメリカにも遠征した。後に彼はオーストラリヤで伝道をし，そこでは副伝道部長であった。その後2年間アメリカ陸軍の務めを果し，ヨーロッパで働いた。

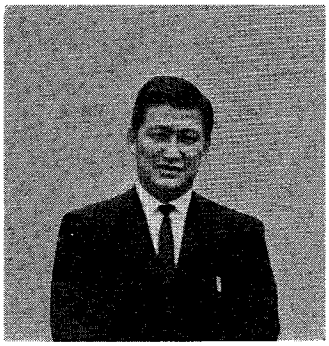
帰国後1958年に父親の新聞会社の編集者となった。1959年に十二使徒会補助のジョン・ロングデン長老とラルー・カー・ロングデンの娘であるシャーロン・ロングデンと結婚した。彼らには，カルヴィン(7才)，キンバリー(2才)の2人の子供がある。1961年にダン長老は父親の新聞社をやめ，ボストン大学に入るため東部へ行った。彼はそこで1966年に渉外に関する修士号を得た。彼はニューヨーク・ヘラルド・トリビューン・フレッシュ・エアー・ファンド会社で渉外部次長として働き，現在の地位（ニューイングランド評議会）についたのは1963年である。ダン長老は今37才で，ボストン・ロータリークラブの会長，アメリカボーイスカウト北東部評議会



議長，ボストン大学附属通信学校の客員講師であり，またいくつかの新聞や渉外専門協会の一員でもある。彼は末日聖徒軍人グループリーダー，エクスプローラー顧問，ニューイングランド伝道部MIAの会長，ワード部長老定員会の会長として働いた。ダン姉妹は現在ボストンステーキ部YWMIAの会長として奉仕している。ダン長老の父は彼の生涯に最も大きな影響を与えてきた。「私にとって父は今まで知った人の中で最も偉大な人です。忙しい時には，家族とどれだけ多くの時間を過したかではなく，どのように家族と交わり，すばらしい影響を与えたかということの方が大切であると父は教えてくれました。ちょっとした言葉や生活方法を通して，父は私たちに深い関係があることを知らせようとしていました。私の家庭では家族の祈りと，それがかもし出す雰囲気に大きな重きを置いていたことを覚えています。マッケイ大管長は私をこの召しに召された時，私の父が私に何をして欲しいと望んでいるかをよく心に留めて新しい責任を全うしてくださいとチャレンジを与えてくださいました。どのようなことでもこの教会にあって奉仕できるということは非常に名誉なことでありますが，特に教会幹部の一人に加えられましたことを心からへりくだって感謝いたします。」

本誌は新らたに召された4人の方々にこれからの奉仕が教会と人類に多大の貢献をされますことを確信し，心からお祝いを申しあげます。

伝道部長会メッセージ



アドニー Y. 小松伝道部長

愛する兄弟姉妹の皆さん

私たちは各地における本年度第２回目の地方部大会に出席して，皆さんとお会いし，結婚と系図の重要性について話しあってまいりました。

結婚は神により定められた神聖な儀式であり，それについては聖典の言葉だけでなく，多くの人々の証詞を聞かされてきました。私たちは両親を離れて，配偶者を見つけ，神聖な結婚の状態に入ると，私たちが地上で守らなければならない神の二つの原則の一つを果たしていることになるのであります。

第一の原則は，人はみな神の国に入るために，権能ある人によりバプテスマを受けなければならないということであります。第二は，私たちはこの世において結婚の契約に入り，夫及び妻として立派な家庭を築き上げ，神の教えを神聖に守らなければならないということであります。

末日聖徒である私たちには，今も永世にもわたる神殿結婚という主により与えられた方法があります。私たちは福音の最も重要な教えの一つであるこの目的達成のために努力しなければなりません。現在の日本ではこれを果たすのは容易ではありません。しかし，過去二回にわたってハワイ神殿訪問旅行をなし遂げ，さらに第３回目を1969年の夏にひかえて目下準備中であります。私は聖徒たちの祝福のために，将来さらに多くの旅行が計画されるにちがいないと思います。私は生涯で最も大切なこの出来事に参加するために，あなたがたが進んで準備をされますように力説いたします。

マッケイ大管長は次のように述べておられます。

「神殿結婚には本当に人をひきつけるものがあり，科学的なひびきさえ感じられます。けれども，神殿に恋人を伴って行く若者は，二人の結合が二人を聖壇に導いた愛と全く同様に永遠であるという理解をもってそこに臨まなければなりません。またそれについてどんな疑いもあってはなりません。

神殿で結婚をするに先だって，あなたは潔い生活をしてきたかどうかが求められるのです。

若い女性であるあなたには，あなたとまさに結ばれようとしている男性が潔い身体をもってあなたのもとに来るという確信があり，相方とも，生活の基いがけがれないものであるという確信を持っていなければなりません。

兄弟妹姉の皆さん，神があなたがたを祝福され，けがれない生活をし続けることができ，伴侶を選ぶ時に主に祈り，導きを求められますように。またもしすでに選んだならば，二人が神の家に入ることができるような生活をし，主があなたがたの生活についてたずねられたならば，正直に「私たちは純潔であります」と答えられますように。

この基いをもって始められる結婚は，あなたがたにこの世においてあるいは永遠にわたって知られる幸福とたえなる喜びをもたらすにちがいありません。」

系図もまた永遠の生命を受けるために，私たちが守らなければならない救いの原則の一つであります。私たちが系図を探求する時に，神の誡命に従っており，系図の記録を神聖に保管する時に，愛する人々を敬っていることになるのであります。

今月の「聖徒の道」のテーマは主の家すなわち神殿に関するものであります。末日聖徒は主により教えられ，求められているので，神殿を建てるのであり，ここで人間の救いを全うするために数々の儀式が執行されるのであります。今日数々の神殿は主としてこの地上で福音を聞く機会を持たずに亡くなった無数の人々の祝福と救いのために維持されております。

今日の神殿内の儀式には次のようなものがあります。

1，バプテスマ，詳しくは死者のバプテスマ

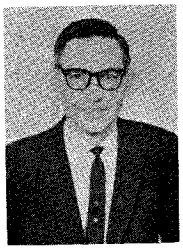
2，神権の聖任とエンダウエント

3，結婚の儀式

4，その他の結び固めの儀式

私は，あなたがたが主の家に入る祝福に与り，救いと昇栄に必要な儀式が受けられますように，また神の祝福とあなたがたの努力によりイエス・キリストの福音の原則に従って生活することができますように心よりお祈りいたします。

神殿と日本の聖徒　ハワイ神殿訪問計画


アンダーセン伝道部長

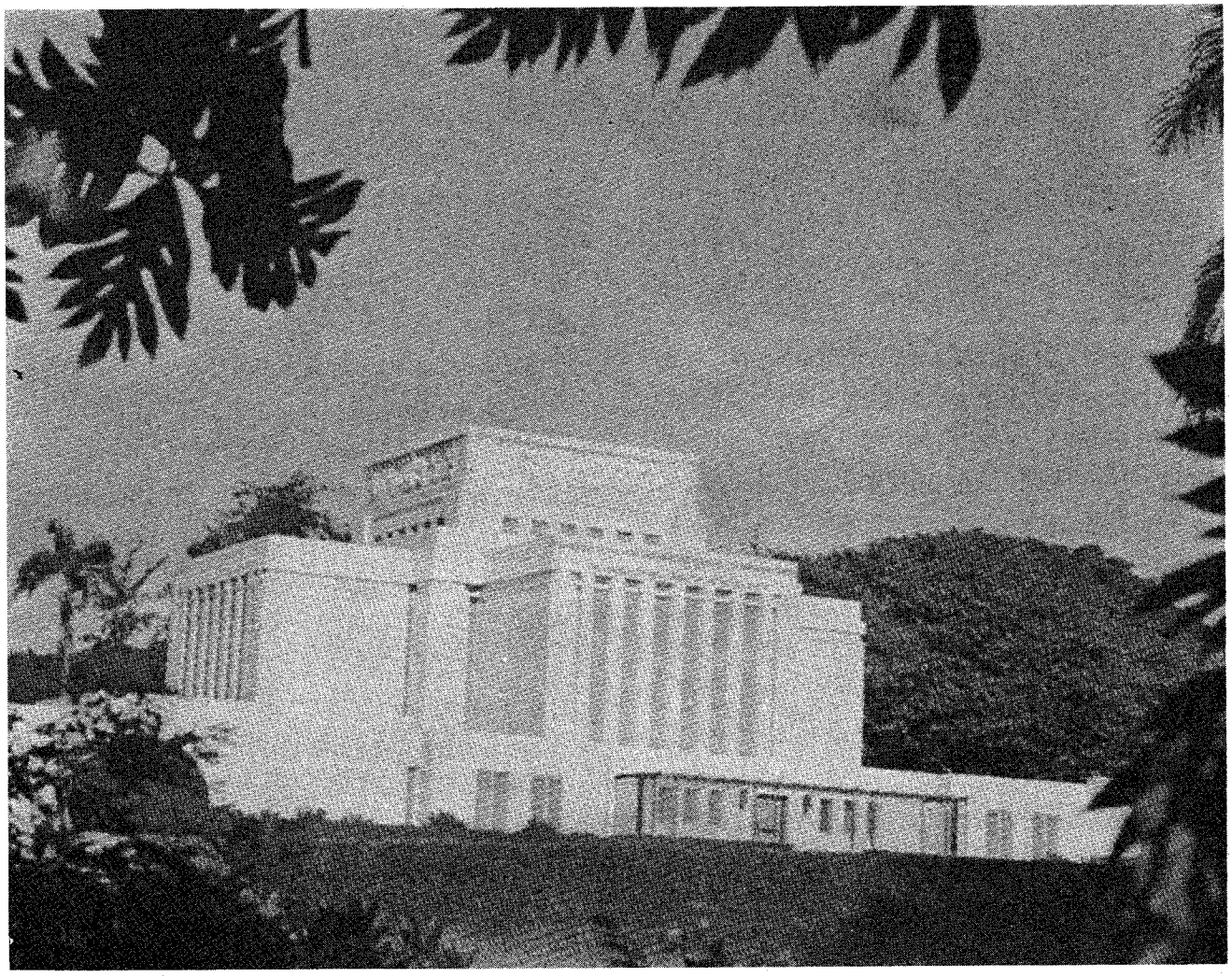
第一回神殿訪問

1965年7月，約160名余りの聖徒は，アンダーセン伝道部長を中心に日本から初めての神殿訪問を行った。

小松伝道部長

第二回神殿訪問

1967年6月，約130名余りの聖徒は，小松伝道部長ご家族と共に，第二回目の訪問を終えた



第三回神殿訪問

1969年夏を目標に準備がなされている。この計画に参加希望する聖徒たちは，今から物心両面にわたる充分な備えをなさるようお願いします。

各地で地区大会開かる

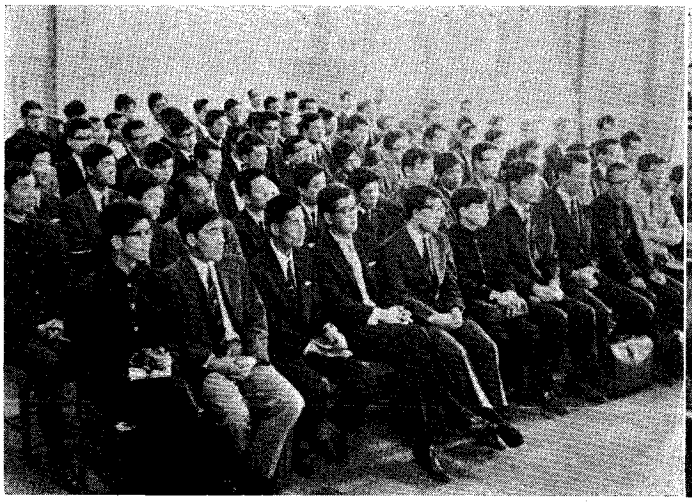
広島大会の兄弟姉妹

＜広 島 大 会＞ 5月4・5日 岡山，広島，高松，柳井の各支部から広島へ集った

四国から集まった高松支部会員の紹介

岡山支部ダンスデモンストレーション

＜名古屋大会＞ 5月11～12日 金沢，名古屋，京都，岡町，阿倍野，西宮，三宮の各支部から名古屋へ集まった



名古屋大会の神権者たち

関西ＬＤＳコーラス

支部だより

母の日に集まったお母さんと子供たち

ＭＩＡ演劇祭で熱演する会員

＜札幌支部だより＞

ひさしぶりに札幌支部の紹介を誌上でします。バプテスマも少し停滞気味でしたが，５月に入るや毎週のように儀式が行なわれ，これが６月までずっと続きそうです。４月14日には山田とみえ姉妹が76才の高齢で改宗され無事水に沈められる儀式を受けました。

若い人々の活躍も目覚ましいものがあります。アロン神権者は，支部運営の中枢の一部をにない，責任と義務を自覚して，例えば，アロン神権の諸活動に支部補助組織に神権を実際に用いています。ＭＩＡ活動もさかんで過ぐる演劇祭にも上演し好評を博し，演劇活動の伝統を固守しています。また５月12日の母の日には，ごらんのように多数の子供たちが出席しました。

６月17日から23日まで支部大会が開かれます。テーマは「主の家族モルモンの輪を広げよう」です。すべての会員の働らきは豊かに実りつつあるようです。ではまた。

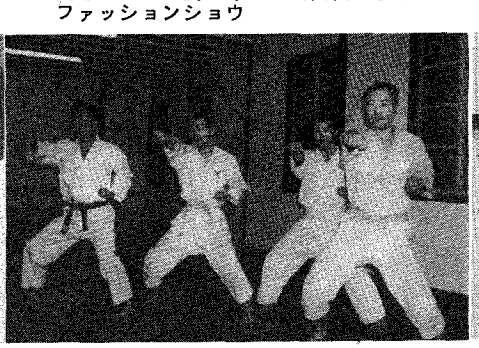
＜金沢支部だより＞

大会には現代の幌馬車に乗って南へ南へ民族の移動が行われる

支部ＭＩＡ大会の呼び物新聞紙によるファッションショウ

扶助協会の姉妹たちすなわちトップレデイの集まり

モルモンの子供たち



神権者による合気道の練習

建築宣教師に召された花沢俊明兄弟と蔵谷周作兄弟

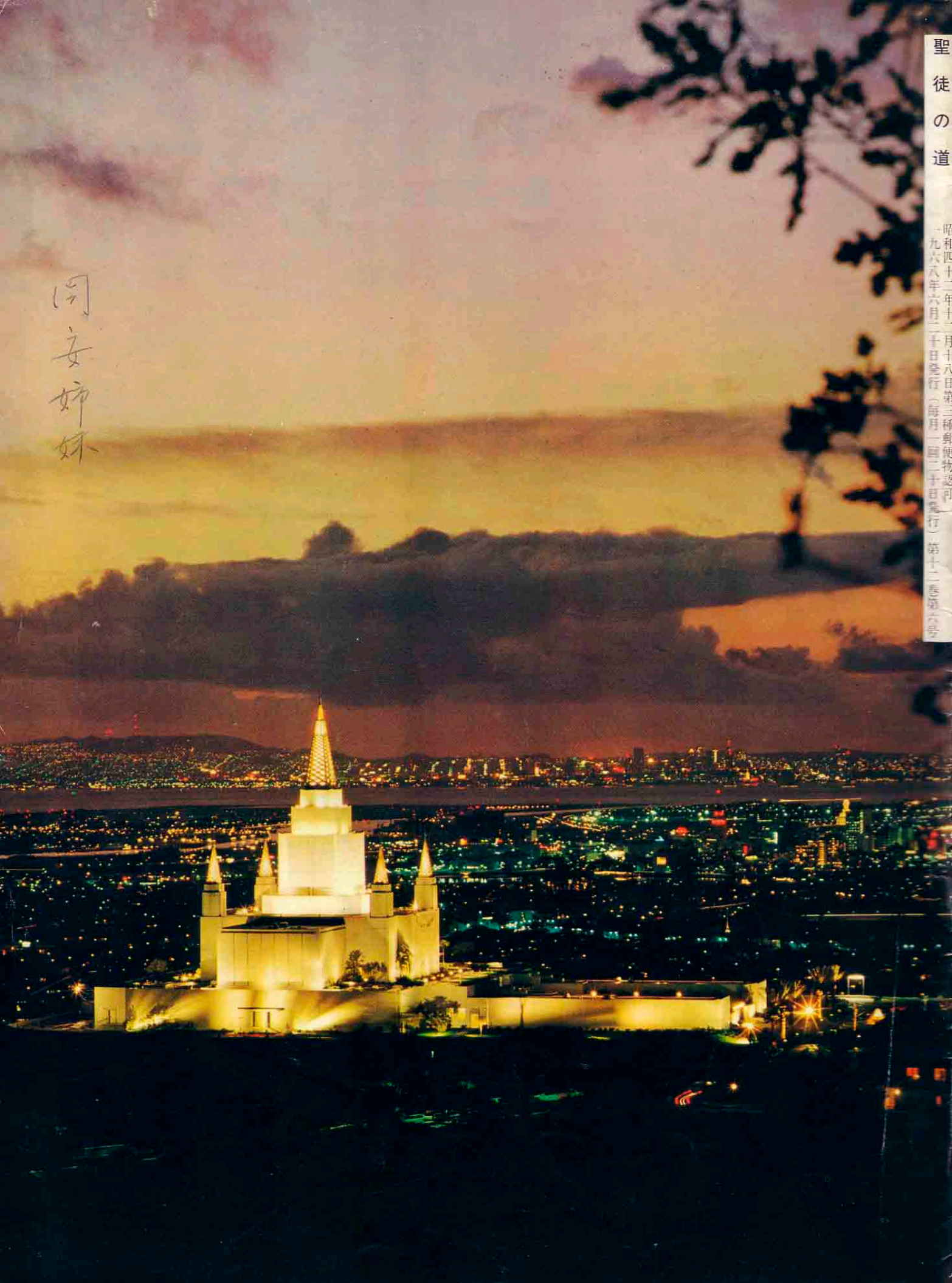
新しく建築予定の神殿

この図は**オグデン神殿**の完成予想図です。**プロヴォ神殿**もこれと同じデザインです。

＊　＊　＊

住所変更支部

小樽支部	小樽市富岡町１－５－23
福島支部	福島市渡利字小久保８－７
新潟支部	新潟市明石２－２－５
三ノ宮支部	神戸市灘区篠原本町４－６－28
北九州支部	北九州市小倉区大字砂津富野口 340－６
熊本支部	熊本市東寺原町64－42
長崎支部	長崎市片淵町２－７－17



聖徒の道

昭和四十二年十二月十八日第三種郵便物認可
一九六八年六月二十日発行（毎月一回二十日発行）第十二巻第六号

同姉妹